蕨野遺跡（わらびの）

高岡町埋蔵文化財調査報告書第６集

１９９４

宮崎県高岡町教育委員会

わらび　の

蕨野遺跡

高岡町埋蔵文化財調査報告書第６集

１９９４

宮崎県高岡町教育委員会

序　　文

高岡町は、宮崎市の近郊に位置し、これから諸開発の増加が予想されます。

本書は、県指定古墳をはじめ多くの遺跡が所在する東高岡地区における民間の土砂採取に伴う事前の発掘調査の報告であります。この調査の結果、古代の生産遺構が確認されました。本書が、埋蔵文化財保存の啓発と学術的研究に役立つことを希望します。

最後に、調査に協力頂いた（有）[redacted]や関係機関の方々に深く感謝申し上げます。

高岡町教育委員会

教育長　篠　原　和　民

例　　言

1．本書は、高岡町教育委員会が（有）[redacted]から受託して1990年度に実施した発掘調査の報告書である。

2．調査は、面高哲郎（現県文化課埋蔵文化財第２係係長）の指導を受けた。

3．報告書作成にあたり、長津宗重氏（宮崎県文化課）、岡本武憲氏（日南市教育委員会）から指導を受けた。

4．調査ならびに報告書作成は、山本賢一朗（同係）・[redacted]（以上同係埋蔵文化財調査室）の協力を得た。

5．本書における方位は磁北、レベルは海抜高である。

6．本書の出土土器観察表における色調は、標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

7．本書の編集は島田がおこなった。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 4
　1　調査に至る経緯 …… 4
　2　遺跡の環境 …… 4
　3　調査の経過と概要 …… 7
　　1　調査の体制 …… 7
　　2　調査の経過 …… 7
　　3　調査の概要 …… 8
Ⅱ　遺構と遺物 …… 9
　1　Dグリット …… 9
　2　Eグリット …… 19
Ⅲ　まとめ …… 30

挿図目次

第1図　蕨野遺跡周辺遺跡分布図 …… 5
第2図　蕨野遺跡周辺地形図 …… 6
第3図　調査区西壁面出土遺物実測図（1/3） …… 7
第4図　蕨野遺跡遺構配置図 …… 8
第5図　Dグリット黒褐色土内出土遺物実測図（1/3） … 9
第6図　第1・3・5号土坑実測図（1/30） …… 10
第7図　第2・4号土坑実測図（1/30） …… 11
第8図　第4・5号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 12
第9図　第1～3窯実測図（1/30） …… 13
第10図　第1・2号窯出土遺物実測図（1/3） …… 14
第11図　第4・6号窯実測図（1/30） …… 15
第12図　第6号窯出土遺物実測図（1/3） …… 16
第13図　Eグリット遺構図 …… 19
第14図　Eグリット黒褐色土内出土遺物実測図（1/3） …… 20
第15図　Eグリット内ピット遺構出土遺物実測図（1/3） … 21
第16図　第7・8号土坑実測図（1/30） …… 22
第17図　第9号土坑実測図（1/30） …… 24
第18図　第6号窯実測図（1/30） …… 25
第19図　第9号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 26
第20図　第5号窯出土遺物実測図（1/3） …… 27

図版目次

図版1　蕨野遺跡遠景 …… 33
　Dグリット全景 …… 33
　第1号土坑 …… 33
図版2　第2号土坑 …… 34
　第3号土坑 …… 34
　第4号土坑 …… 34
図版3　第1・3号窯 …… 35
　第2号窯及び第5号土坑 …… 35
　第6号窯 …… 35
図版4　Eグリット全景 …… 36
　第7号土坑 …… 36
　第8号土坑 …… 36
図版5　第9号土坑 …… 37
　第9号土坑遺物　出土状況 …… 37
　第5号窯 …… 37
図版6　全景（南から） …… 38
　全景（北から） …… 38
　全景（北から） …… 38
図版7　出土遺物（杯） …… 39
図版8　出土遺物（高台付皿） …… 40
　出土遺物（高台付椀） …… 40
　出土遺物（紡錘車外） …… 40

表目次

表1　Dグリット出土土器観察表 …… 17
表2　Eグリット出土土器観察表 …… 28

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

藪野遺跡が所在する東高岡地区は、宮崎市街に近いこともあり、以前から、小規模な造成や土砂採取による遺跡破壊が発生しているところである。特に、土砂採取においては、採取後に排土と共に有害な建築廃材も埋めて表土をかぶせるという悪質な事業者もいて、遺跡だけでなく環境破壊も著しい。

1990年６月、東高岡地区で造成をおこなっているとの情報が町教育委員会に入った。その現場確認の途中、別の場所で土砂採取の現場を発見した。ここは、蜜柑園だったところで、すでに剥された表土からは、多くの土師器片が表採された。早速、町教育委員会は、ここが周知の遺跡でなかったことから遺跡発見の手続きをとり、事業主である（有）[redacted]と協議をおこなった。（有）[redacted]からは事業継続の意向があり、それを受けて、町教育委員会では文化財保護法の主旨を説明し、発掘調査に対する理解と協力を求めた。そして、1990年11月、町教育委員会は、（有）[redacted]の経費負担による発掘調査の委託契約を締結し、1990年11月16日から12月18日まで発掘調査を実施した。

2　遺跡の環境

高岡町は、年間を通じて温暖であり、大淀川が町中央を東流することから、１日の気温差がさほどないところである。大淀川は、町内では浦之名川をはじめ大小の支流をもち、谷や小丘陵を形成している。これらの小丘陵は、そのほとんどに２次アカホヤの堆積がみられ（一里山地区を除く）、その下に幾層かを挟みシラス層となる。

高岡町のほとんどの遺跡はそれらの丘陵に位置しており、旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が多く存在する。

旧石器時代では、表採資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、向屋敷遺跡は、集石遺構と共に剥片等が出土している。

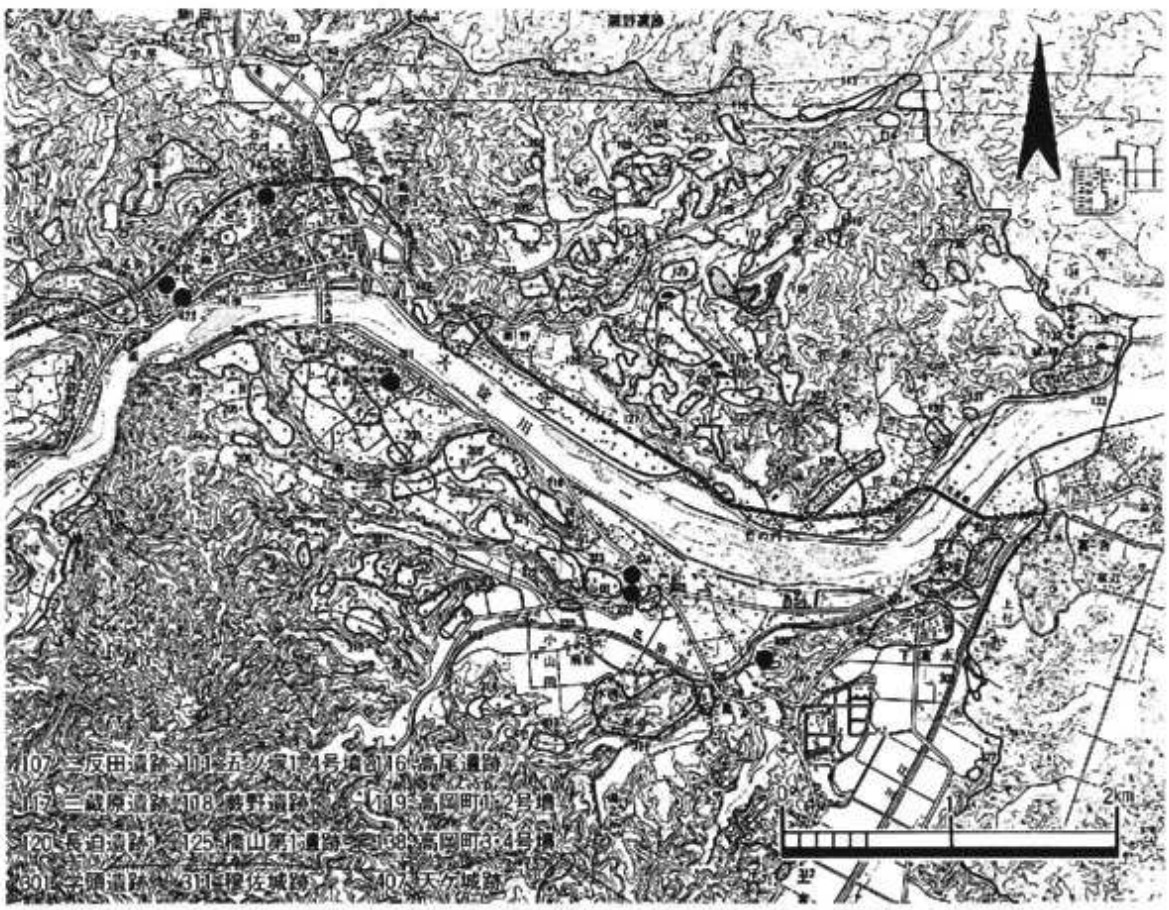
縄文時代では、早期と後期の遺跡が多く知られている。早期では、橋山第１遺跡・犬ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡で、集石遺構と共に押型文土器等が出土している。また、犬ヶ城跡や橋山第１遺跡Ｃ地区では、環状石斧が出土している。後期では、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に貝殻条痕文土器が表採される。調査では、学頭遺跡や城ヶ峰遺跡で確認されている。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。

古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がる。特に久木野地下式横穴墓群で3基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。東高岡地区の古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では、初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八児遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言われていた。古代になると、宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。特に今回報告する蕨野遺跡では、土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

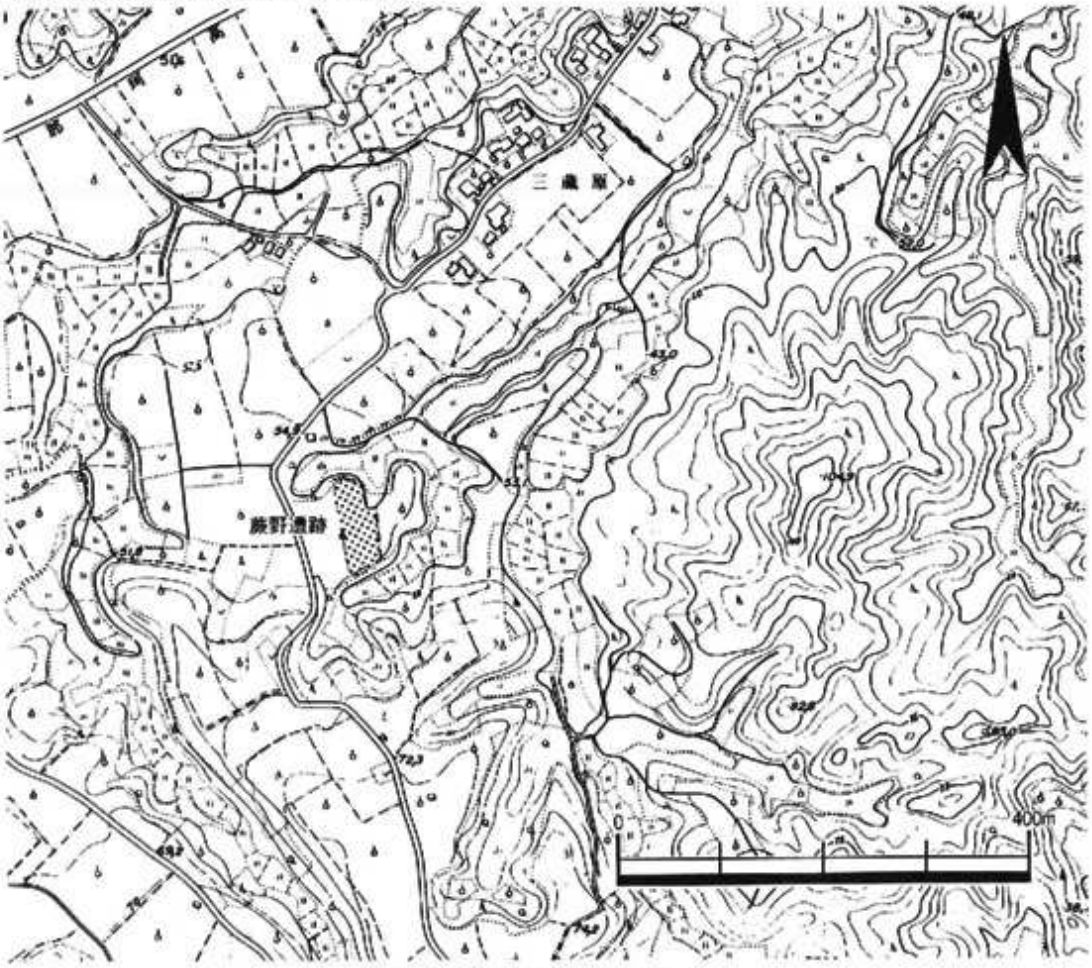
中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の



第1図　蕨野遺跡周辺遺跡分布図

中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されているところである。縄張り調査の成果として、南九州特有の特徴を持つとともに、機能文化をも持たせた山城として評価されている。その後、穆佐城は、島津久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあった。また、このころには、山城などの城郭遺跡以外でも町内全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地は穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の麓地に多くの郷士を居住させた。そして、綾・倉岡とともに関外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防御の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷士屋敷群と町家群に分割されている。そして、昨年度の町家の調査で素掘の井戸や土壙等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表採遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。



第2図　藏野遺跡周辺地形図

さて、蕨野遺跡は、大淀川の北側丘陵に位置する。この丘陵は、標高60m前後の平坦地に比高差15m程の小規模な谷がいくつも入り込み、谷底は水路が形成され現在水田が営まれている。この丘陵の遺跡は、橋山第1遺跡（縄文早期）、飛渡遺跡（縄文前期）、丹後堀遺跡（弥生時代）、高岡古墳1・2号墳、五ツ塚古墳、そして蕨野遺跡と同時期と思われる二反田遺跡など、28箇所の遺跡が立地している。

3　調査の経過と概要

1　調査の体制

調査体制は次のとおりである。

調査主体　高岡町教育委員会

1990年度（調査）

	教育長	篠原和民
	教育課長	橋口律夫
	社会教育係長	岩崎健一
庶務担当	同係主任主事	佐川洋三
調査担当	同係　主事	島田正浩

1993年度（整理）

	教育長	篠原和民
	社会教育課長	岩崎健一
	社会教育係長	本田正雄
	同係　主事補	山本賢一朗
整理担当	同係　主事	島田正浩

2　調査の経過

11月16日　重機による表土剥ぎ

17日　杭うち。グリットを設定する。

19日　調査区北側から遺構検出。蜜柑栽培時の攪乱坑を多数検出

21日　調査区北側で土坑を検出。第1号土坑とする。

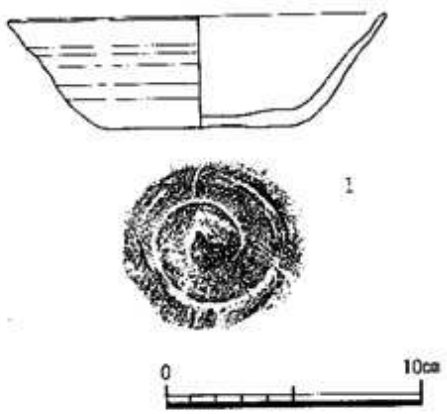
26日　調査区中央部（D・Eグリット）で、焼土と黒褐色土に広く被われた所を2箇所検出する。

28日　Dグリットで第1号、第2号窯を検出

井上和人氏（文化庁調査官）、面高哲郎氏（県文化課）来現し指導を受ける。

12月4日　全景写真を撮る。遺構毎に写真撮影、実測作業を行う。

14日　第5号窯（Eグリット）の断面観察をする。第5号窯の床面下に土坑状の遺構を検出する。第9号土坑とする。



第3図　調査区西壁面
出土遺物実測図（⅓）

18H　第9号土坑の遺物を取り上げ、調査を終了する。

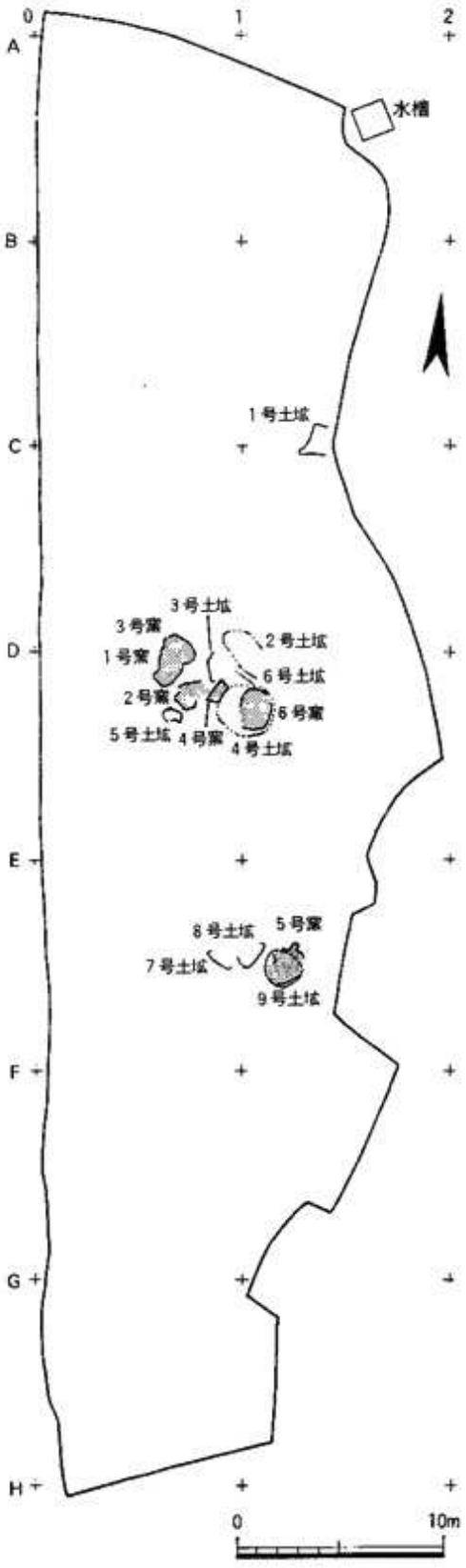
3　調査の概要

蕨野遺跡は、丘陵に入る小谷の奥まったところの上の段に広がる平坦地にある。調査は、東側をすでに削平されていたため、残りの1,000㎡に対し実施した。遺構の検出に先立ち調査区に10mピッチでグリットを設定した。遺構の検出段階で多くの帯状の掘削痕が確認され当初遺構かと思われたが、それは蜜柑栽培時の攪乱であった。これにより、遺構自体も削平を受けているのではないかと思われたが、その予想は見事に的中し、遺構のプランや切り合い等、状況の把握は非常に困難であった。そのような、状況の中で土坑が9基、土師器の窯が6基以上を検出したが、前にも言ったように明確なプランをもつものは少ない。遺構の検出は、アカホヤ火山灰層の面で行った。攪乱坑の隙間から、アスファルトに似た粘質性と光沢性のある黒褐色土の広がりがDグリットとEグリットで確認され、その黒褐色土を取り除くと赤く焼けた焼土面が広がっており、それぞれで土坑と窯が検出された。遺構は群として認められ、DとE、両グリット双方で集中して確認された。焼成面を残す窯は、5基前後を1グループとし、まとまって存在している。

遺物は、須恵器の出土は、あるものの数片にしかすぎず、そのほとんどは土師器であった。器種もほとんどが供膳用であり、雑器はほんの数点であった。須恵器と共伴を考え、9世紀後半を中心とするものと思われる。

また、調査区西側壁面に薄い焼土層と土師器杯(1)が確認され、遺跡が西側へ広がっていることが、予想される。

なお、詳しい報告は、Dグリットを中心にする遺構とEグリットを中心にする遺構に分けて、第Ⅱ章で報告する。



第4図　蕨野遺跡遺構配置図

Ⅱ　遺構と遺物

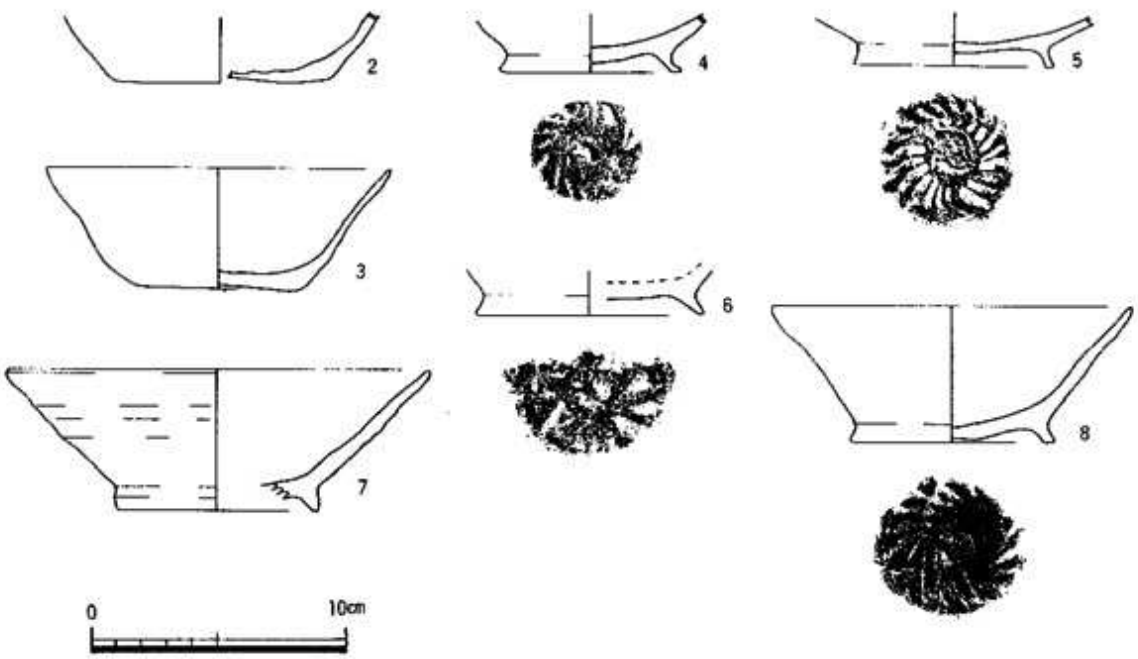
1　Dグリット

ここでは、土坑6基、窯5基を検出したが、遺構が集中しているところに大きな攪乱坑があり、遺構の壁面や床面に残った埋土により判断している遺構も少なくない。

まず、攪乱土を除いた跡の遺構検出では、アスファルトに似た粘質性と光沢性のある黒褐色土が第6号窯周辺で確認され、それ以外は、特に第1号窯や第2号窯は焼土と遺物が露呈した状態であった。黒色土は、遺構面を被っているようにも見られるが、遺構の埋土として堆積したものか、それとも遺構面を削平して堆積した後世の攪乱によるものか、明確に確認はできなかった。

第1号土坑

調査区C－1グリットの東端に位置する。遺構の東側は調査区からはずれ、南側は攪乱坑により破壊されており、全体プランはつかめない。床面は段を成して落ちていくが、段の比高差は7㎝ほどであり、しかも、壁面はなだらかでシャープさを欠く。埋土は淡黄褐色で粘性土が堆積し、遺物の出土はなかった。



第5図　Dグリット黒褐色土内出土遺物実測図（⅓）

第2号土壙

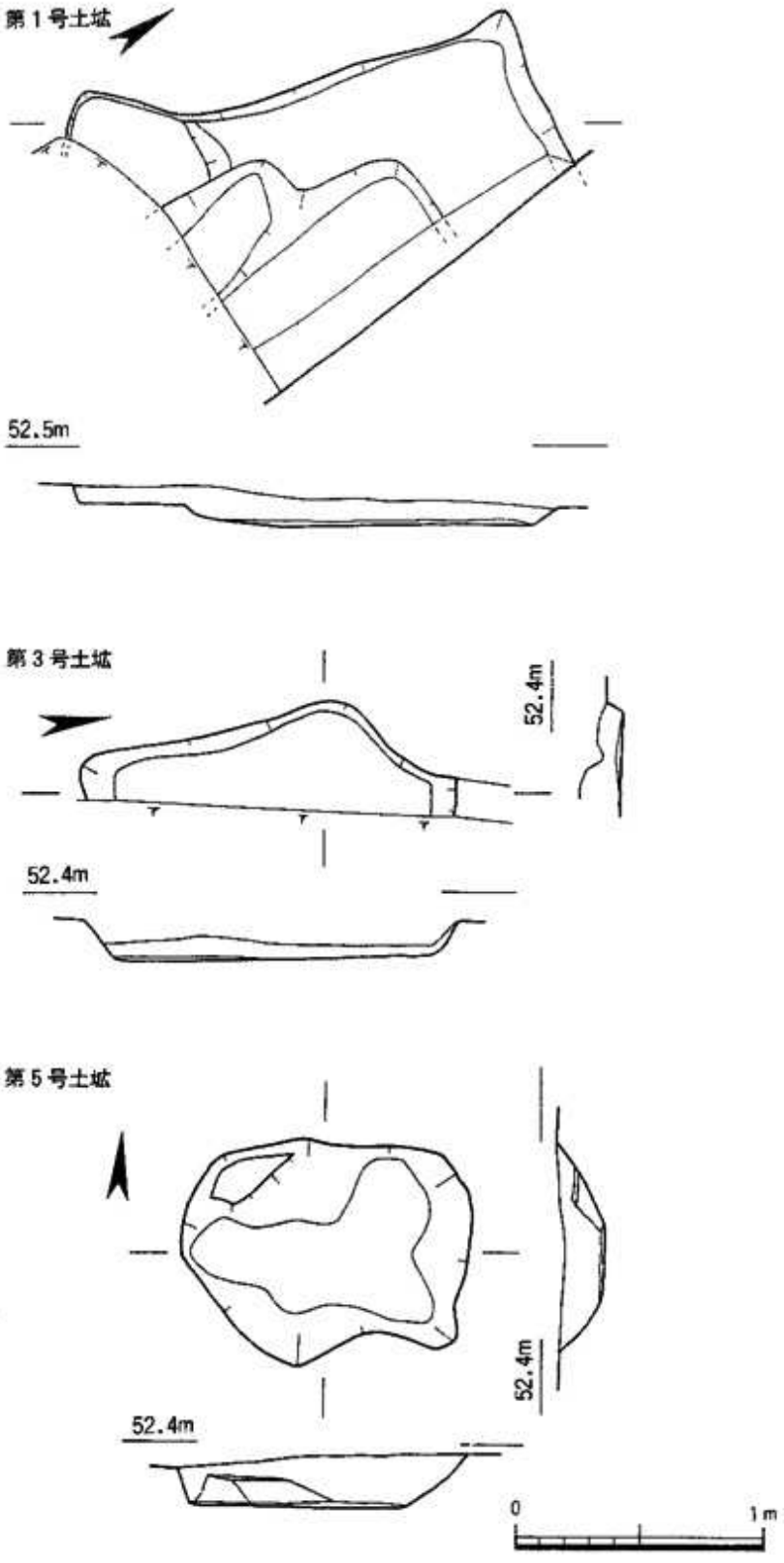
攪乱坑により各所寸断されている。埋土は暗黄色粘性土で、壁面は残った埋土で各々のラインを確認し、それぞれが結ばれる可能性をもとに推定ラインを確定する事で、ひとつの遺構プランとした。残存部分の床面は平坦であり、壁はいずれも約40°前後の傾斜で立上がる。

第3号土壙

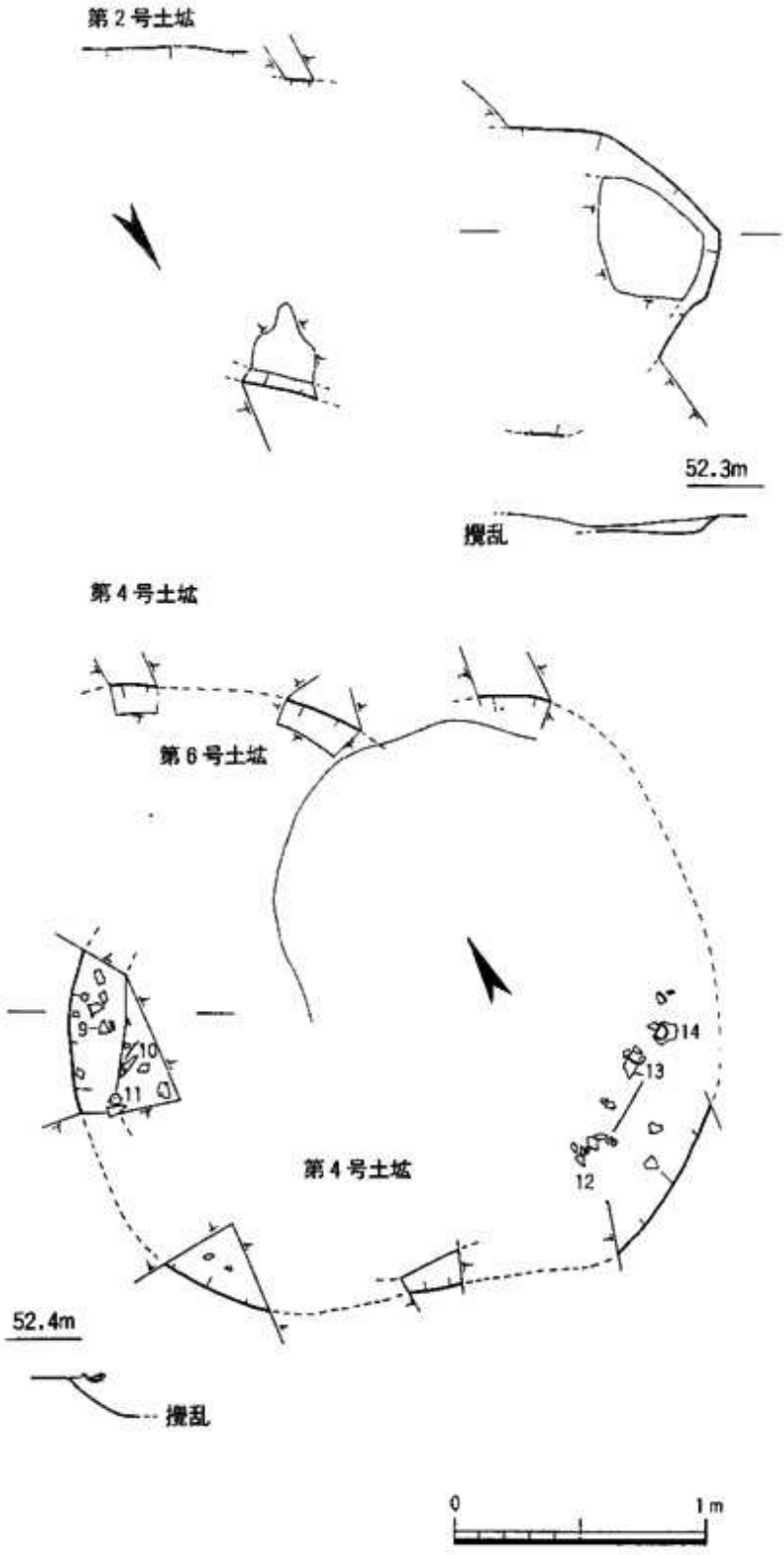
この遺構は、攪乱は受けているものの、かろうじて半分ほどは残存している。残存部分は、長軸約1.5m、床面は平坦で、壁は約55°の傾斜で立上がる。埋土は暗黄色粘性土で、遺物の出土はなかった。

第4号土壙

攪乱坑により寸断される。この遺構も埋土である暗黄色粘性土を基準とし、ラインを確定した。長軸約2.7m、短軸2.4mで円形に近いプランをなす。この遺構の東側半分にすっぽり入るように第6号窯が在る。第6号窯の埋土（褐色土）の上に、この遺構の埋土が埋積していることから、この遺構は第6号窯を切り、しかも西側では第4号窯をも切る。しかし、第6号土壙との切り合い関係はわからない。床面は残存部分でみると平坦で



第6図　第1・3・5号土壙実測図（1/20）



第7図　第2・4号土壙実測図（1/20）

あるが、やや西側が下がっている。壁は35°の傾斜で立上がる。

遺物は、須恵器甕体部片1点の他はすべて土師器である。杯、高台をもつ皿・椀が主に出土した。杯は、口縁部においてやや外に開き気味のものや底部径が大きくヘラ切り痕を明瞭に残すものがある。また、土師器（杯底部）で内面に漆のようなものが付着しているものが出土した。

第5号土壙

第2号窯の南側に位置する。長軸1.15m、短軸0.9mをはかり、北側は隅丸状となるが、南側は不定形なプランをなす。残深度0.2m、床面は平坦である。壁は西側70°他は40°前後の傾斜で立上がる。北西側でテラス状の小さな段を設けている。

遺物は、高台をもつ土師器椀が出土し、底部にヘラによる花弁状模様がある。

第6号土壙

この遺構は、最初第4号土壙の一部かと思ったが、第4号土壙の遺構ラインに繋げてしまうには無理があっ

たので、別に遺構番号を設けたものである。攪乱坑により、遺構プランはほとんどわからない。

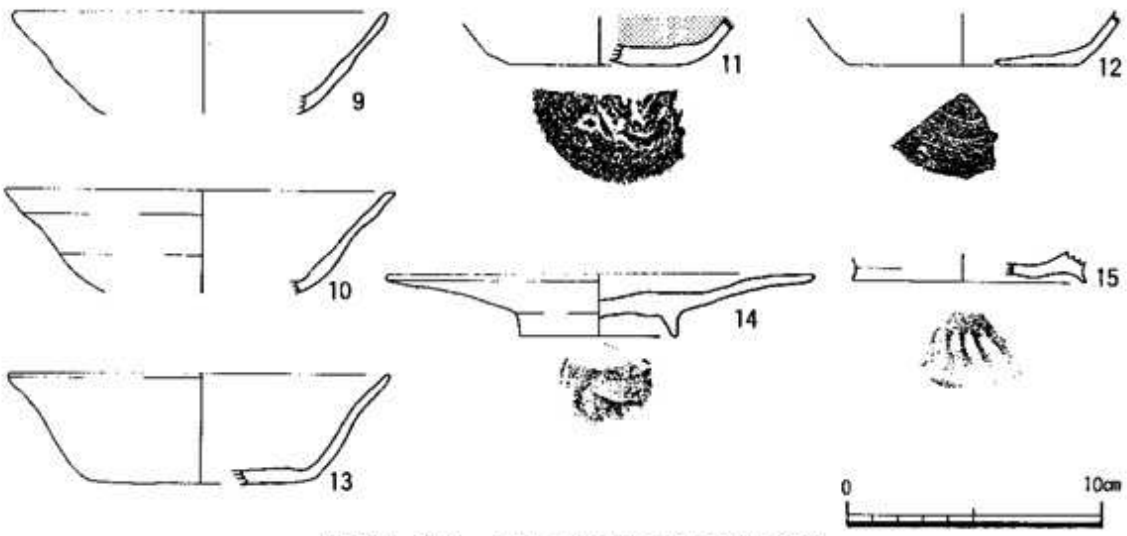
第1号窯

壁の立上がりは5cm前後、かろうじて床面が残っているのみである。その床面も熱により赤く変色した範囲をもって遺構のプランにおきかえている。西側が攪乱坑で破壊されていることで遺構全体のプランははっきりしないが、この遺構周辺に遺構面に続く焼けた痕跡がないことからも現況に近いプランでおさまるものと思われる。初め、この遺構は1つの遺構かと思われた。しかしながら、この遺構の中央部で重なるようなプランを残しており、両方の窯の熱が重なったためと思われる痕跡として、その中央部は帯状に強く熱を受けて赤く変色している。土層観察によれば、第3号窯の焼成面と一連のものと思われるその変色した面を第1号窯が切った痕跡があることから、3号窯のよりも1号窯が新しいと判断した。1号窯の埋土は、炭と焼土が混入した濁灰色粘性土で、1号窯全体にひろがっており、南側の落ち込み部分までおおっている。この落ち込みは、1号窯の埋土におおわれることから1号窯より新しいとは考えられず、落ち込み部分へ堆積した焼土と炭がブロック状に多く含まれる埋土は、それ自体に熱を受けた痕跡がない。これは、時間差を判断する材料に必ずしもならないが、関連性は否定できない。直接焼成行為に機能したものかどうか疑問ではあるが、焼成面である西側の床面が東側に比べ焼けた痕跡が明確に残っていないことから、落ち込みの部分の埋土が焼成後？の炭をかき出す時に崩落した焼土と炭の堆積と仮定すると、落ち込みは第1号窯と一連のものと考えられる。

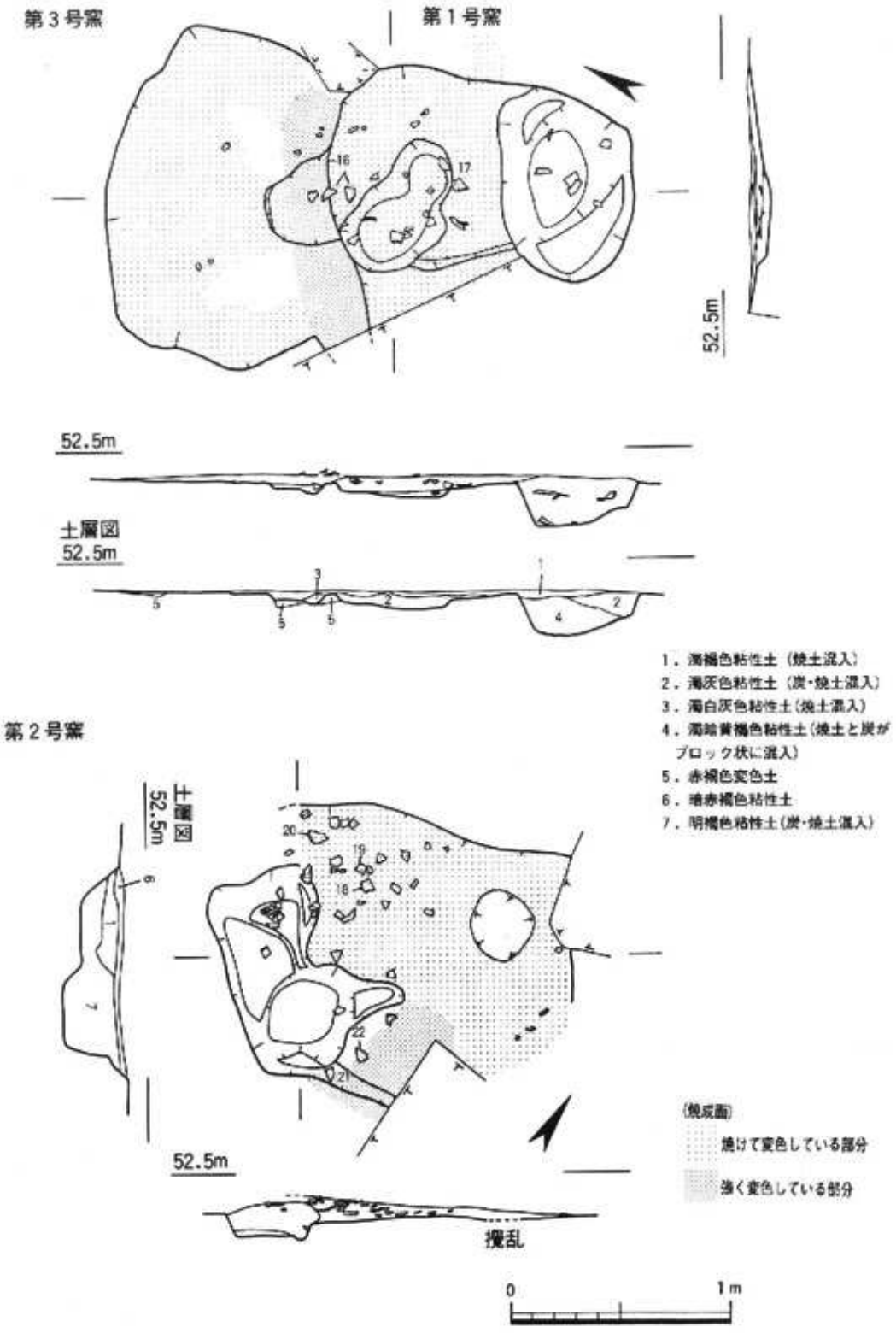
遺物は、須恵器片1点が床面から出土した以外は、すべて土師器片である。杯は、口縁部においてやや外に開き気味のものがある。

第2号窯

部分的に攪乱を受け、東側では第4号窯に接している。この遺構のプランは、第1号窯同様



第8図　第4・5号土坑出土遺物実測図（⅓）



第9図　第１～３窯実測図（1/30）

床面しか残っておらず、熱で赤く変色した範囲としたが、南側では、それが弱く明確さに欠ける。また、焼成面も焼きしまっているという風ではなく、埋土っぽい状態というか、焼成面がやや風化したような状態である。この遺構も第1号窯同様落ち込みを持つが、この埋土は、上層が第2号窯と同じであり、その下の層の状態も含めて基本的には、第1号窯と同じである。

遺物は、土師器杯、高台をもつ皿・椀が出土している。

第3号窯

第1号窯と切り合い関係にあり、その状況は、第1号窯のところで述べたとおりである。この遺構も床面しか残っておらず、かろうじてそれがわかる程度である。赤く変色した痕跡は、遺構ライン付近でみられ、内側にいくほど弱くなる。

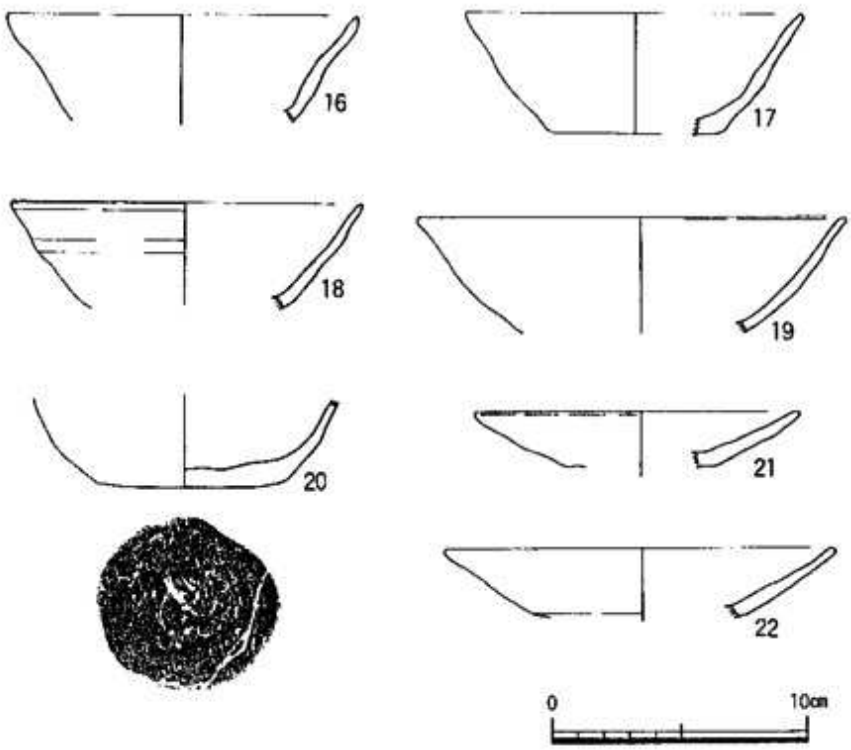
第4号窯

周りを攪乱坑で破壊され、また、東側部分が第4号土坑に切られる。遺構検出時では、第4号土坑との切り合い関係がはっきりとわからなかったが、土層観察により、遺構の床面下の赤褐色変色土の部分を第4号土坑の埋土が切っていたので第4号窯が古いと判断した。この遺構のプランは明確でないが、3～5cm程の落ち込みがみられるところを遺構のラインとした。このライン周辺で、熱で焼けて赤く変色したところが広がっているが焼きしまっているというほどではない。床面下に、第4号土坑と重なる付近は約10cm、遺構ライン付近は約5cmまで熱が加わり赤く変色している。埋土は焼土と灰が混ざった粘質土であり、炭の混入がみられた。

遺物は土師器杯、高台をもつ皿・椀が出土している。

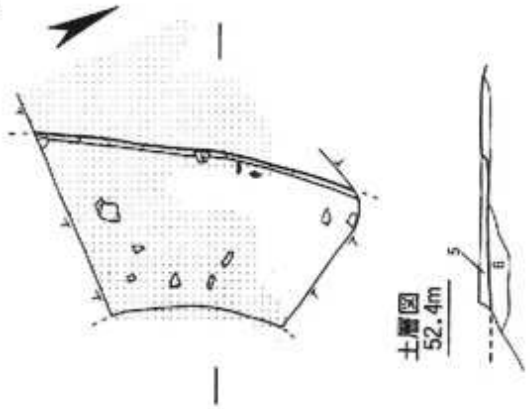
第6号窯

攪乱坑と第4号土坑に上面を削平されている。プランは南側が攪乱により破壊されているが、隅丸長方形をなし、長軸約2m、短軸約1.5mをはかる。壁は約40°前後の



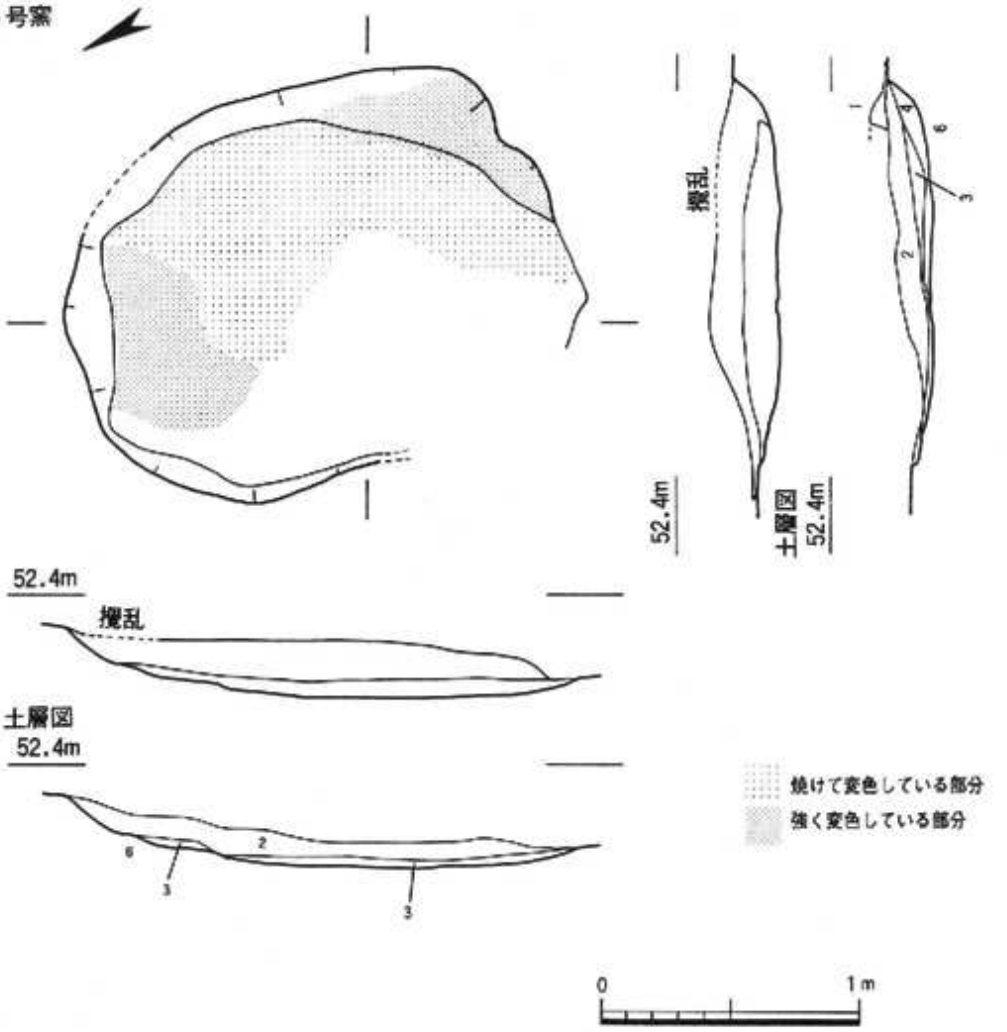
第10図　第1・2号窯出土遺物実測図（⅓）

第４号窯



1．暗黄色粘性土
2．褐色粘性土
3．濁淡褐色粘性土
4．赤褐色粘性土（焼土・炭・灰が混入）
5．濁暗黄褐色弱粘性土（炭・灰を多く混入）
6．赤褐色変色土

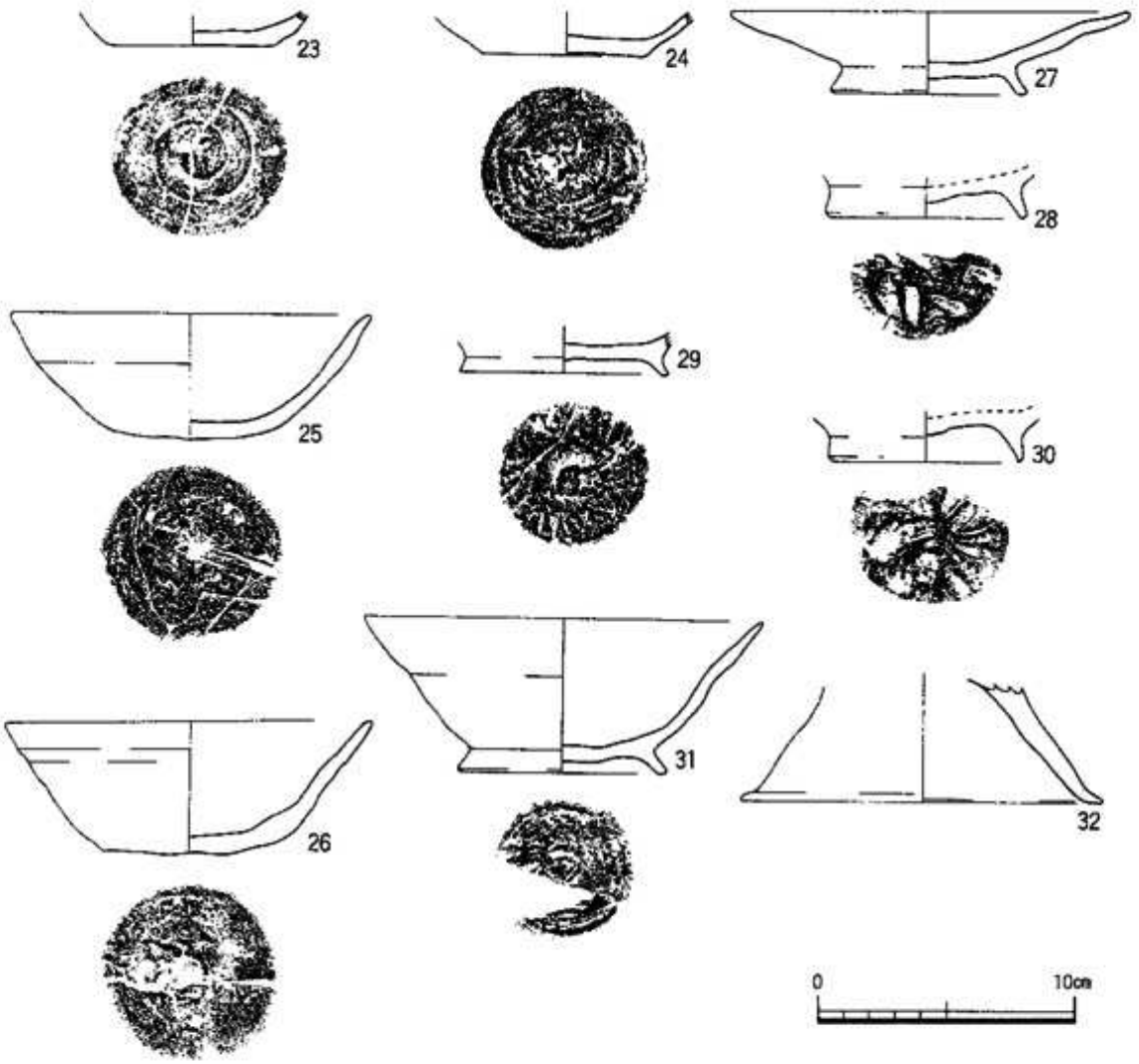
第６号窯



第11図　第４・６号窯実測図（1/30）

傾斜で立上がる。焼けた痕跡は床面西側を除き確認できる。特に、北側の床面と南側の壁面でかなり強く焼けて残っており硬くしまっている。ただ、北側床面が強く焼けた痕跡を残しているにも関わらずそこから立上がる壁面には、全く焼けた痕跡がみられない。埋土は、床面に焼土と灰・炭を含む粘性土（4）、その上に濁淡褐色粘性土（3）、そして西側でアスファルトに似た粘質性と光沢性のある黒褐色土と撹乱坑により削平されている褐色粘性土（2）からなる。遺物のほとんどは、褐色粘性土からであるが、一部流れ込みも含まれる。

遺物は、土師器がほとんどで、須恵器は甕体部片1点のみであった。土師器の器種は、杯、高台をもつ皿・椀・甕が主である。杯は、体部下からヘラケズリの痕跡が残るものがある。皿、椀の高台は丁寧なつくりで先端が外に開く。甕は、体部内面に縦方向のケズリをもつ。



第12図　第6号窯出土遺物実測図（⅓）

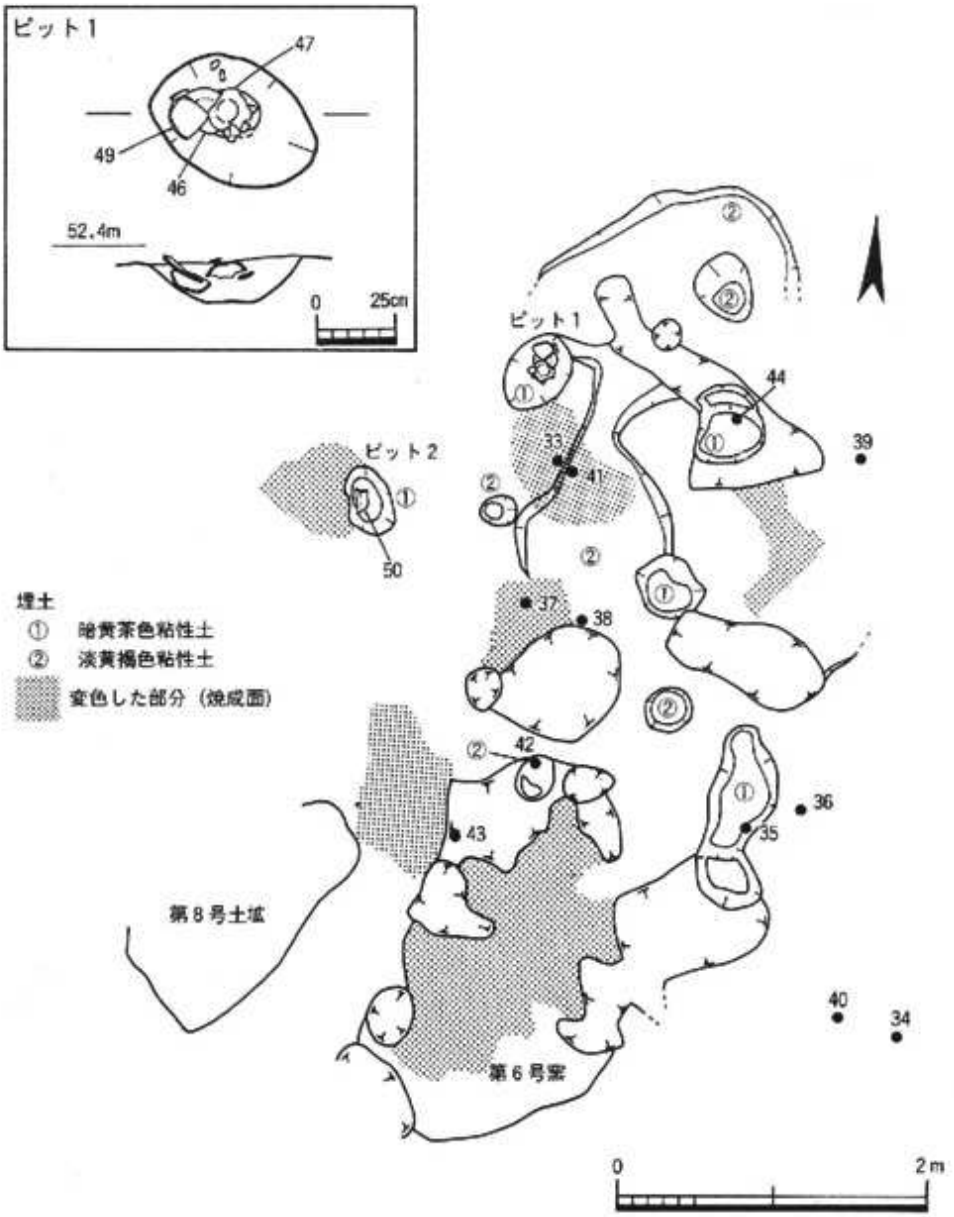
表1　Dグリット出土土器観察表

遺物番号	遺構番号	図版番号	出土地点	器形	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整・手法 内面	調整・手法 外面	調整・手法 底部	備考
1	3	7	西側壁面	杯	14.5	6.6	4.3	(底部) にぶい黄橙色 Hue10YR 7/3 (体部一部) 灰白色 Hue10YR 7/1	(底部) にぶい黄橙色 Hue10YR 7/3 (体部 殆) 灰白色 Hue10YR 7/1	茶色粒(中)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
2	5	—	D−1 グリット黒褐色土内	杯	—	8.2	—	淡黄色 Hue 2.5Y 8/3	淡黄色 Hue 2.5Y 8/4	極小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
3	5	7	D−1 グリット黒褐色土内	杯	13.6	6.6	4.6	(底部) 灰色 Hue 7.5Y 4/1 (体部) 上部 にぶい黄橙色 Hue10YR 7/2	灰色 Hue 7.5Y 4/1	茶色粒を少しと小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
4	5	—	D−1 グリット黒褐色土内	高台付椀	—	7.1	—	(体部) 浅黄橙色 Hue 7.5YR 8/3	浅黄橙色 Hue 7.5YR 8/3 (底部) 灰黄色 Hue 2.5Y 7/2	茶色粒と極小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 高台は丁寧なつくりで先端が外に開く	底部花弁状模様
5	5	—	D−1 グリット黒褐色土内	高台付椀	—	7.5	—	浅黄橙色 Hue 10YR 8/3	浅黄橙色 Hue 10YR 8/3	茶色粒と石英を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
6	5	—	D−1 グリット黒褐色土内	高台付椀	—	8.8	—	橙色 Hue 5 YR 7/8	橙色 Hue 5 YR 7/8	茶色粒(中)を含む	堅緻	——	ヨコナデ	——	花弁状模様
7	5	8	D−1 グリット黒褐色土内	高台付椀	16.6	8.0	5.5	(体部) にぶい黄橙色 Hue 10YR 7/3 (底部) 黒褐色 Hue 10YR 3/1	(体部) にぶい赤褐色 Hue 7.5R 5/3 (底部) 暗灰色 Hue N 3/	小砂粒と茶色粒を含む	堅緻 外側粒に焼しまっている	ヨコナデ	ヨコナデ	——	熱により口縁部変形
8	5	8	D−1 グリット黒褐色土内	高台付椀	13.8	7.8	5.2	灰色 Hue7.5Y 4/1	浅黄橙色 Hue 7.5YR 8/4 (底部) 灰色 Hue 7.5Y 4/1	茶色粒と極小砂粒を含む	やゝ堅緻	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 高台は開き気味	底部花弁状模様
9	8	—	第4号土壙	杯	14.35	—	—	にぶい黄橙色 Hue10YR 7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR 7/4	精良に近い	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部にくびれをもつ	——	
10	8	—	第4号土壙	杯	15.1	—	—	浅黄橙色 Hue10YR 8/4	浅黄橙色 Hue10YR 8/4	茶色粒(小)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部にくびれをもつ	——	
11	8	—	第4号土壙	杯	—	6.76	—	黒色 Hue7.5Y 2/1	灰色 Hue10Y 4/1	極小砂粒と茶色粒(中)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	漆状のもの付着
12	8	—	第4号土壙	杯	—	9.1	—	にぶい黄橙色 Hue10YR 7/4	浅黄橙色 Hue10YR 8/4	茶色粒(小)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ 体部下ヘラケズリ	ヘラ切り	
13	8	7	第4号土壙	杯	15.0	9.0	4.3	(体部) にぶい橙色 Hue7.5YR 7/4 (底部) にぶい黄橙色 Hue10YR 7/3	にぶい橙色 Hue7.5YR 7/4	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
14	8	8	第4号土壙	高台付皿	16.5	6.25	2.45	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/3	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
15	8	—	第5号土壙	高台付椀	—	9.2	—	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR 8/4	極小砂粒を微量含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 高台は指でつまんでナデた程度	底部花弁状模様

遺物番号	図版番号	写真図版	出土地点	器形	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整・手法 内面	調整・手法 外面	調整・手法 底部	備考
16	10	—	第1号窯 2層	杯	12.4			浅黄橙色 Hue10YR 8/4	淡黄色 Hue 2.5Y 8/3	極小砂粒を含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ 頸部にくびれをもつ	——	
17	10	—	第1号窯 2層	杯	13.2	—	4.65	(体部) 浅黄橙色 Hue10YR 8/4 (底部) 橙色 Hue7.5YR 7/6	(体部) 黄灰色 Hue2.5Y 6/1 (底部) 橙色 Hue7.5YR 7/6	極小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	——	
18	10	—	第2号窯 6層	杯	13.3	—	—	(体部) 浅黄色 Hue 2.5Y 8/3	(体部) 浅黄色 Hue 2.5Y 8/3	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	——	
19	10	—	第2号窯 6層	杯	17.2	—	—	浅黄橙色 Hue 10YR 8/3	にぶい黄橙色 Hue 10YR 7/4	極小砂粒を含む	堅緻	ナデ	ナデ	——	
20	10	—	第2号窯 6層	杯	—	7.2	—	にぶい黄色 Hue 10YR 6/3	(体部) 灰褐色 Hue 10YR 5/2 (底部) 浅黄橙色 Hue 10YR 8/3	茶色粒を含む	堅緻	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	
21	10	—	第2号窯 6層	高台付皿	12.4	—	—	淡黄色 Hue 2.5Y 8/3	淡黄色 Hue 2.5Y 8/3	極小砂粒微量と茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ		
22	10	—	第2号窯 6層	高台付皿	15.0		—	灰黄色 Hue 2.5Y 7/2	灰色 Hue 5 Y 5/1	茶色粒(大)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	——	
23	12	—	第6号窯 2層	杯	—	6.5	—	淡黄色 Hue 2.5Y 8/4	淡黄色 Hue 2.5Y 8/4	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
24	12	—	第6号窯 2層	杯	—	6.5	—	浅黄橙色 Hue10YR 8/4	浅黄橙色 Hue 10YR 8/4	茶色中粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
25	12	7	第6号窯 2層	杯	13.7	6.8	5.65	(体部) にぶい橙色 Hue 7.5YR 7/4 (底部) 黒褐色 Hue10YR 3/1	(体部) にぶい黄橙色 Hue10YR 7/4 (底部) 褐灰色 Hue10YR 4/1	茶色粒を含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ 体部下ヘラケズリ	ヘラ切り	
26	12	7	第6号窯 2層	杯	14.2	7.0	5.6	浅黄橙色 Hue 7.5YR 8/6	浅黄橙色 Hue 7.5YR 8/6	茶色粒を少し含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
27	12	8	第6号窯 2層	高台付皿	15.2	7.6	3.3	浅黄橙色 Hue 10YR 8/3	浅黄橙色 Hue10YR 8/3	極小砂粒と茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
28	12	—	第6号窯 2層	高台付椀	—	7.8		赤橙色 Hue 7.5YR 8/6	赤橙色 Hue 7.5YR 8/6	極小砂粒と茶色粒を含む	堅緻	—	ナデ	ヘラ切り 高台先端細い	底部雑な花弁状模様
29	12		第6号窯 2層	高台付椀	—	8.1	—	にぶい黄橙色 Hue10YR 7/2	(底部) にぶい赤橙色 Hue10YR 7/2	茶色粒(大)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
30	12	8	第6号窯 2層	高台付椀	—	7.6		(底部) 橙色 Hue7.5YR	(底部) 橙色 Hue7.5YR 一部分黒く変色	茶色粒を含む	堅緻	——	ヨコナデ	ヘラ切り 高台先端細い	底部雑な花弁状模様
31	12	8	第6号窯 2層	高台付椀	15.6	8.2	6.0	にぶい黄橙色 Hue10YR 7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR 7/4	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
32	12	—	第6号窯	脚付椀?	13.9	—	—	にぶい黄色 Hue 2.5Y 6/3	橙色 Hue 5 YR 7/6	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	——	

2 E グリット

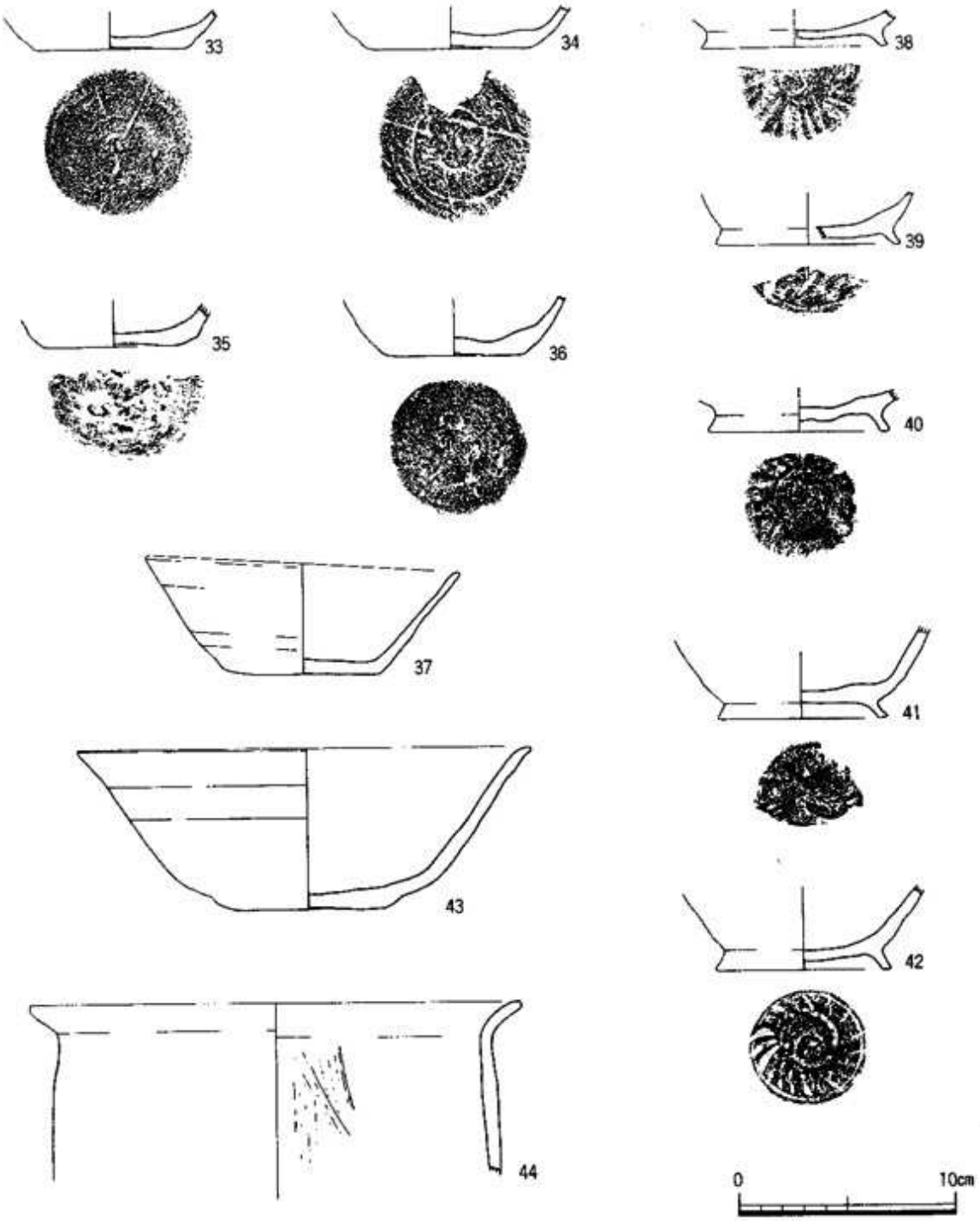
このグリットでは、土坑2基、窯1基を検出したが、Dグリット同様攪乱により遺構プランを把握するのは困難である。遺構検出時は、アスファルトに似た粘質性と光沢性のある黒褐色土がこのグリット内西側一面をおおっていた。この黒褐色土を除去した段階で焼けた面や遺構を確認したが、ほとんどは黒褐色土により遺構面の破壊をうけており、プランとしてとらえることはできなかった。しかしながら、部分的に残っている焼成面をみる限り、いくつかの窯が



第13図　Eグリット遺構図

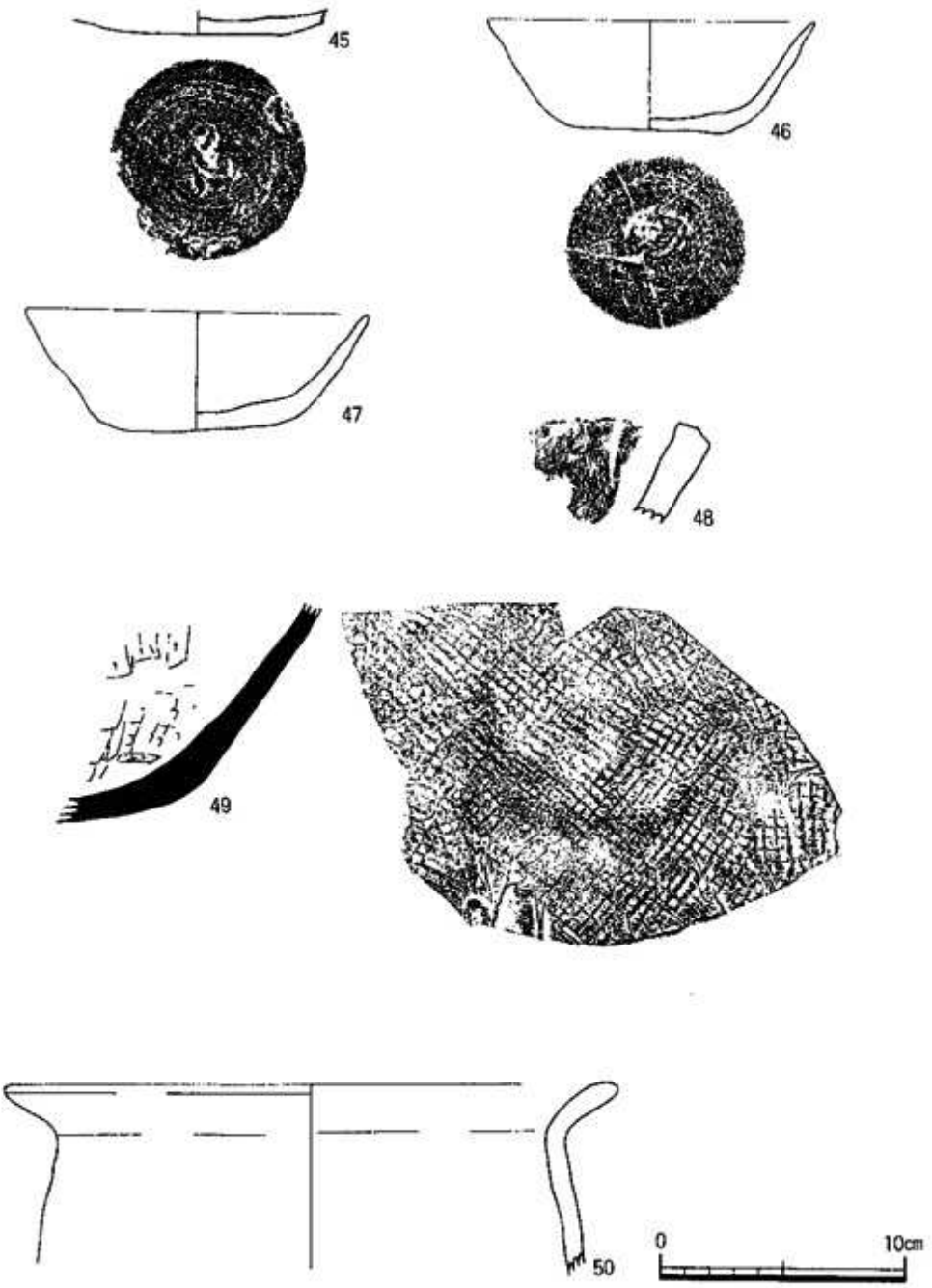
あったことを知ることができる。また、それらの焼成面を切るように暗茶色粘性土を埋上とするピット状の遺構をいくつか検出した。

遺物は、黒褐色土内から多く出土したが、焼成面に対する遺物は把握できない。器形は供膳



第14図　Eグリット黒褐色土内出土遺物実測図（⅓）

用を主とし、遺物をみる限り、杯や椀を中心に幾型式かに分類でき、時期的に幅は狭いものの分かれると思われる。また、ピット状の遺構からはピット１より須恵器甕片と一緒に土師器杯が出土した。



第15図　Eグリット内ピット遺構出土遺物実測図（⅓）

第７号土壙

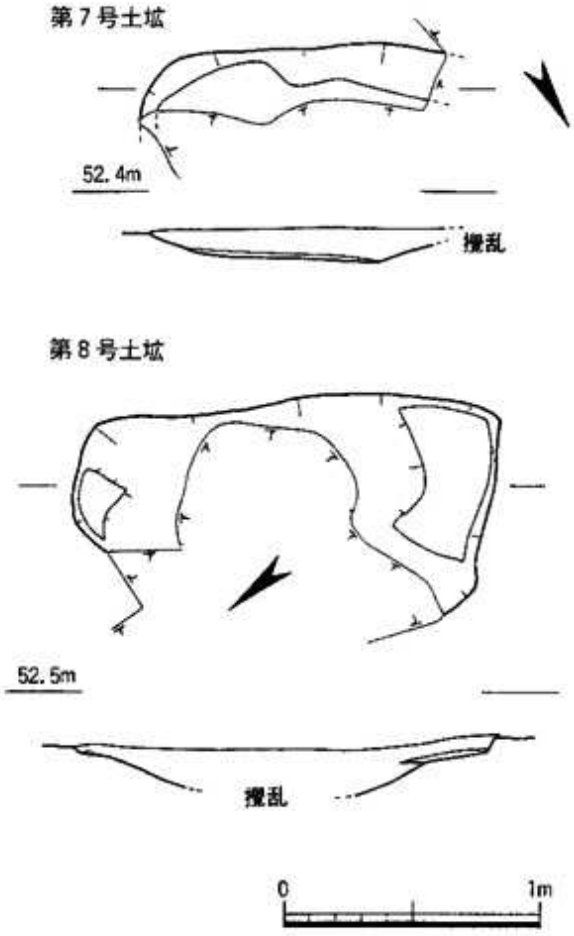
攪乱による破壊のため一部を残すのみである。隅丸状のプランになると思われる。埋土は暗黄色粘性土である。北側横に、８号土壙が位置し、そのため、この遺構のプランは大きなものではない。

第８号土壙

遺構の西側から中央部にかけて攪乱による削平を受けている。西側にテラスをもち、隅丸長方形に近いプランになると思われる。壁面は約20°前後で立上がりゆるやかである。

第９号土壙

第５号窯の焼成状況を土層から観察しようと掘削した時に、その下から検出されたものである。プランは隅丸長方形を基本とし、いくつかのテラス状の平坦面から構成されているが、このようなプランは、この遺構の中で切り合った痕跡ではない。また、西側になだらかに段をなして立上がる部分がある。これは、地山と思われる上砂（表土に近い部分）が埋土下層中にブロック状に含まれていることから、なんらかの理由で徐々に崩落したものと思われる。この遺構の深く掘削されたところは深さ約１ｍで、壁はほぼ垂直気味に立上がる。埋土は、地山上砂がブロック状に各々の層に含まれている。最下層は、淡青灰色粘性土（13）で細かく砕かれた炭が多く含まれている。その上には暗青灰色粘性土（12）が堆積し、この層で完形に近い遺物が一括で出土している。埋土の上層になると、第５号窯による焼成跡がはっきりと見ることができる。堆積状況からみる限り、各層に含まれるブロック状の地山土は少なく、掘り上げた土砂を短期間で埋め戻したとは考え難い。もし、短期間に掘り上げた土砂で埋めたとすれば、埋土に地山土がまとまって埋まった部分があるはずであるが、それは遺構掘削時にはまったく確認されていない。土砂は自然堆積に近いものであり、層位もはっきりとしている。ただ、埋土が攪乱を受けていないと仮定すれば、暗青灰色粘性土（12）は、東側から人為的に土砂が投げ入れられたとみることができるが、確率は低い。



第16図　第７・８号土壙実測図（1/30）

遺物は先に述べたように、暗青灰色粘性土の同じレベルにおいて出土した土師器杯、高台付椀、甕を、一括資料としてとらえている。

杯は、底径の小さいもの（５３外）と、それより一回り大きなもの（55.56）に分けることができる。前者は、径が６cm前後で、ヘラ切り後に外側にナデを施し中心部をそのまま残す。口縁部は、外にやや開き気味となる。後者は、径が７cm前後で、ヘラ切り後に前面にナデを施す。そして、底部が粘土板をはりつけたような形をなしているものがある。高台付椀は、底部に花弁状模様があり、その上をナデている。高台はしっかりした風ではなく、外側にやや開く。甕は、体部が膨らず、内面縦方向にケズリがみられる。また、上層から土師器杯、甕、布痕土器が出土した。

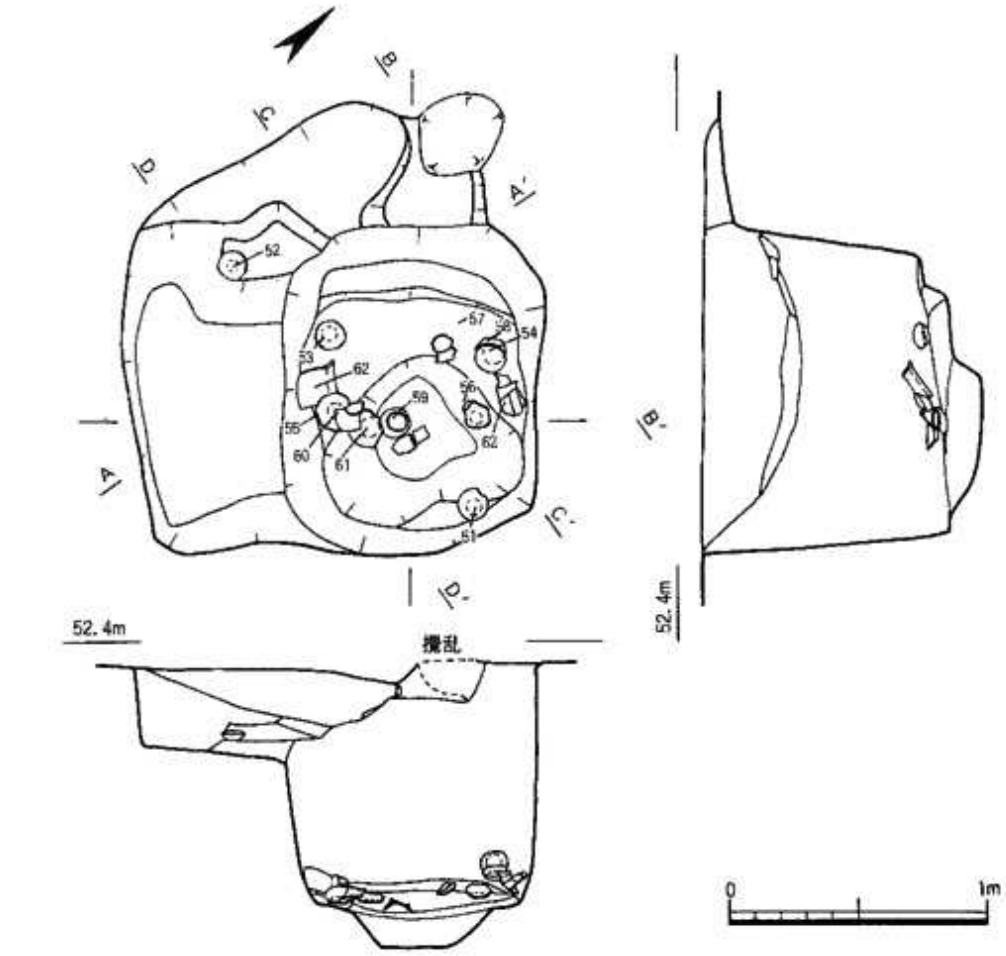
第５号窯

第５号窯は第９号土坑の上面で検出された。

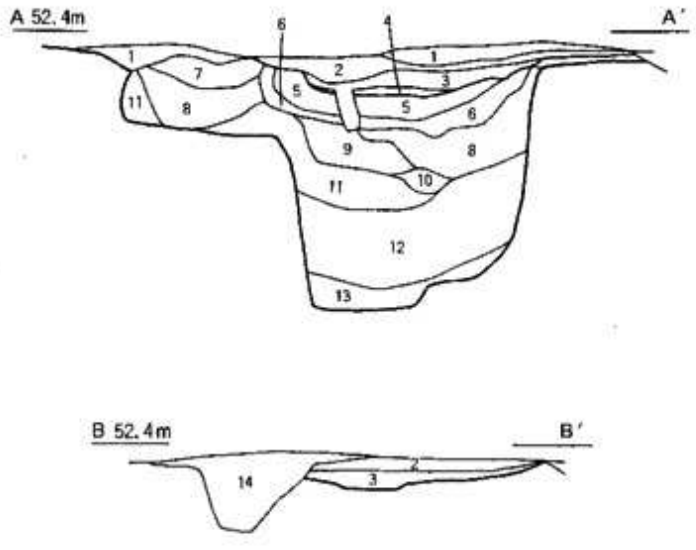
この遺構は、焼けて赤く変色した部分と埋土として考えた濁暗黄色粘性土のラインをプランとしているが北側ははっきりと判断できていない。中央部分で深く、壁はなだらかに立上がるが、壁面としてとらえられる部分はわずかで残存状況はよくない。焼成の痕跡は広がっており、土層観察によると、熱による変色が厚さ10～15cmほどに及んでいる。ただし、北側の床面平坦なところはその½程度である。変色した層を包むようにその下層に白色粘土を多量に混入した硬い層が堆積している。変色した層は、もともと層位として分かれていたものではなく、この層の一部であったと考えられる。窯を造るときに床面にこの粘土混じりの土砂を積み固めた可能性もあるが、断定はできない。

遺物は、須恵器壺頸部片１点の他は、土師器で杯、高台をもつ椀、皿、甕、布痕土器、紡錘車が出土した。

杯は、底径が７cm前後のものと、それよりも大きいものがある。前者は、第９号土坑出土の杯と同様、底部全面にナデを施しヘラ切りの痕跡を消している。後者は、ヘラ切りの痕跡がうず巻状に明瞭に残るものが多い。高台付椀は、高台の先端が外に開くものと全体的に外側に開くものがある。いずれも花弁状模様をもつ。



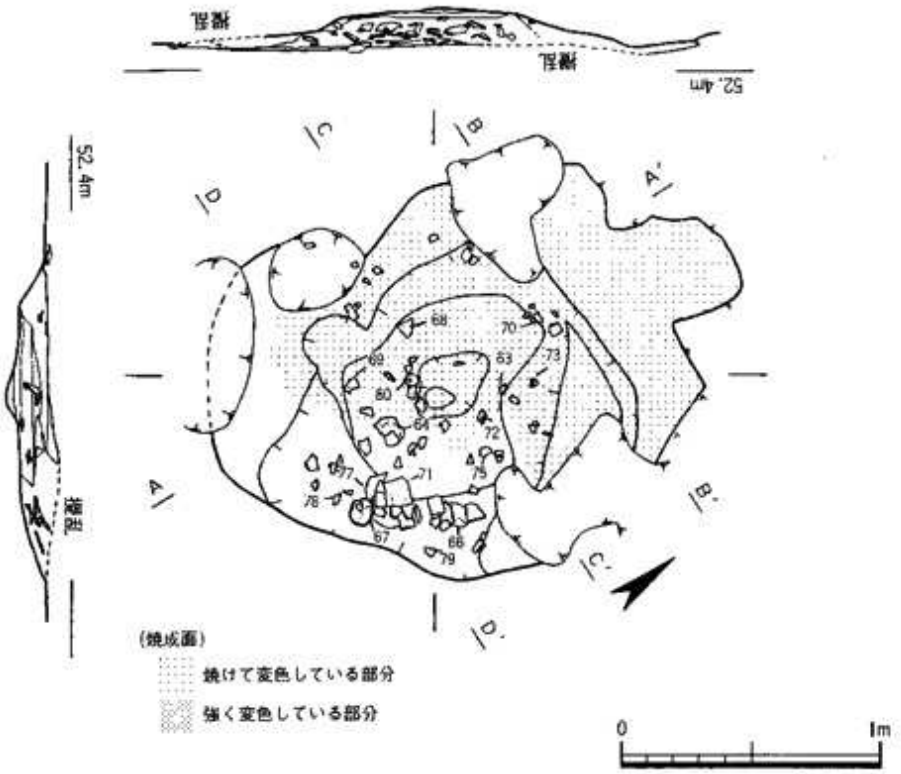
土層図



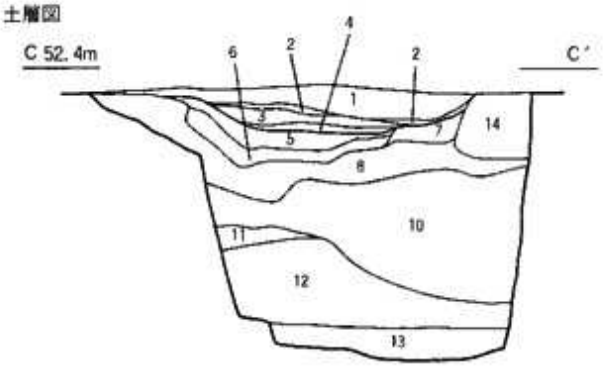
1．黒褐色粘性土（アスファルトに似て粘質性と光沢がある）
2．暗黄褐色弱粘性土（焼土、炭が混入し、下層部分に灰が多く見られる）
3．淡赤褐色変色土（粒子は少し荒い程）
4．暗赤褐色粘性土（焼土粒が大きく荒い炭が少し混入）
5．暗赤褐色変色土（焼土粒が細かく、かたくしまっている）
6．暗赤紫褐色変色土（かたくしまっている）
7．黄褐色粘性土（白色粘土多量に混入し、かたくしまっている）

次ページに続く

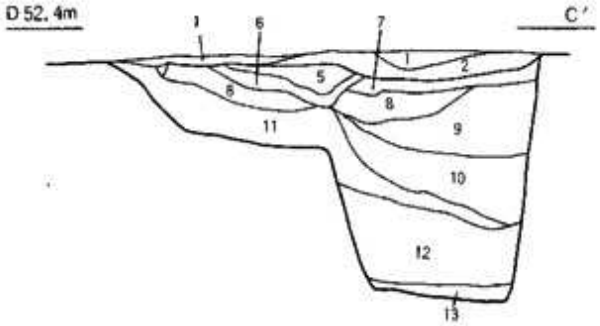
第17図　第９号土壙実測図（1/30）



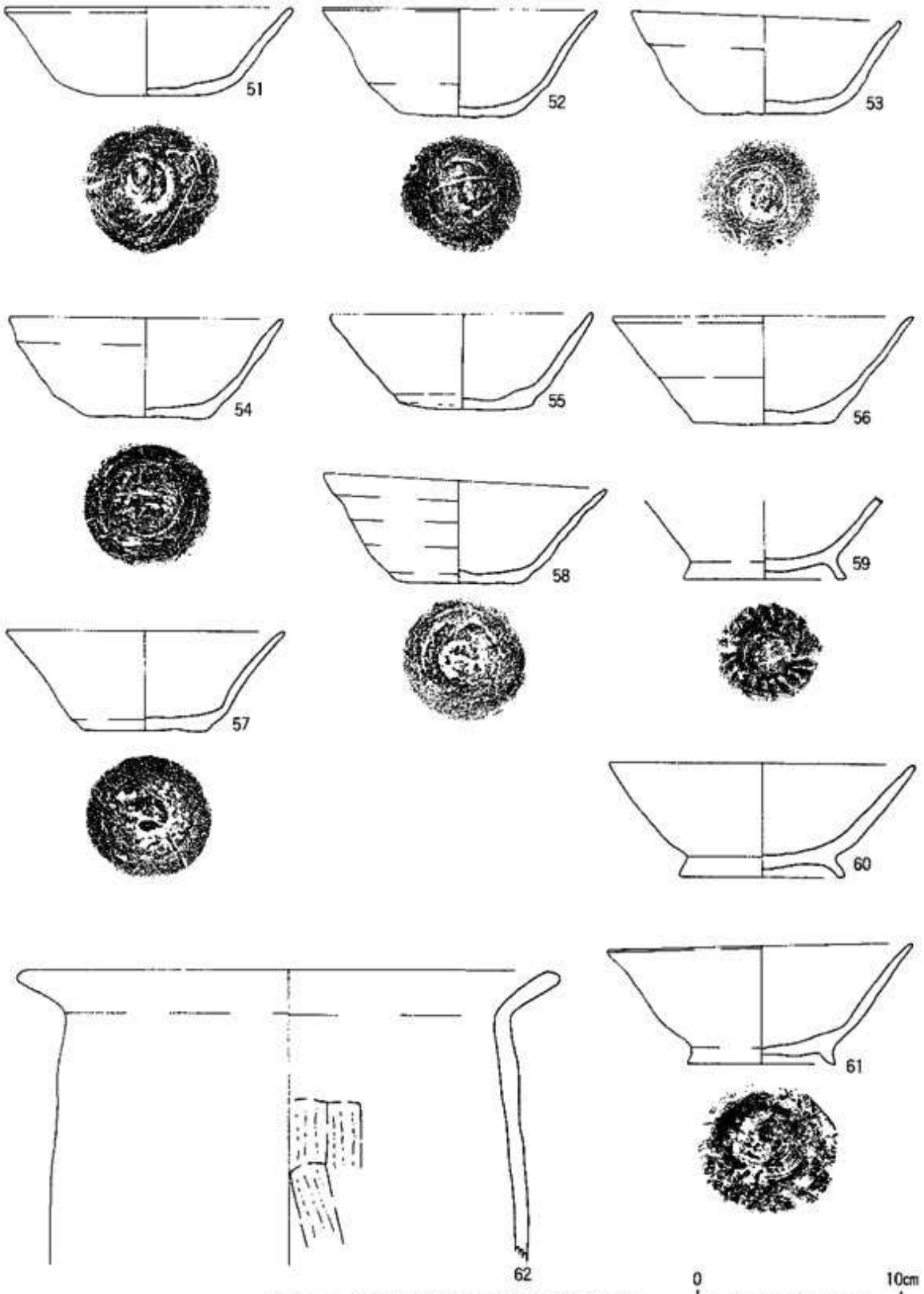
土層図



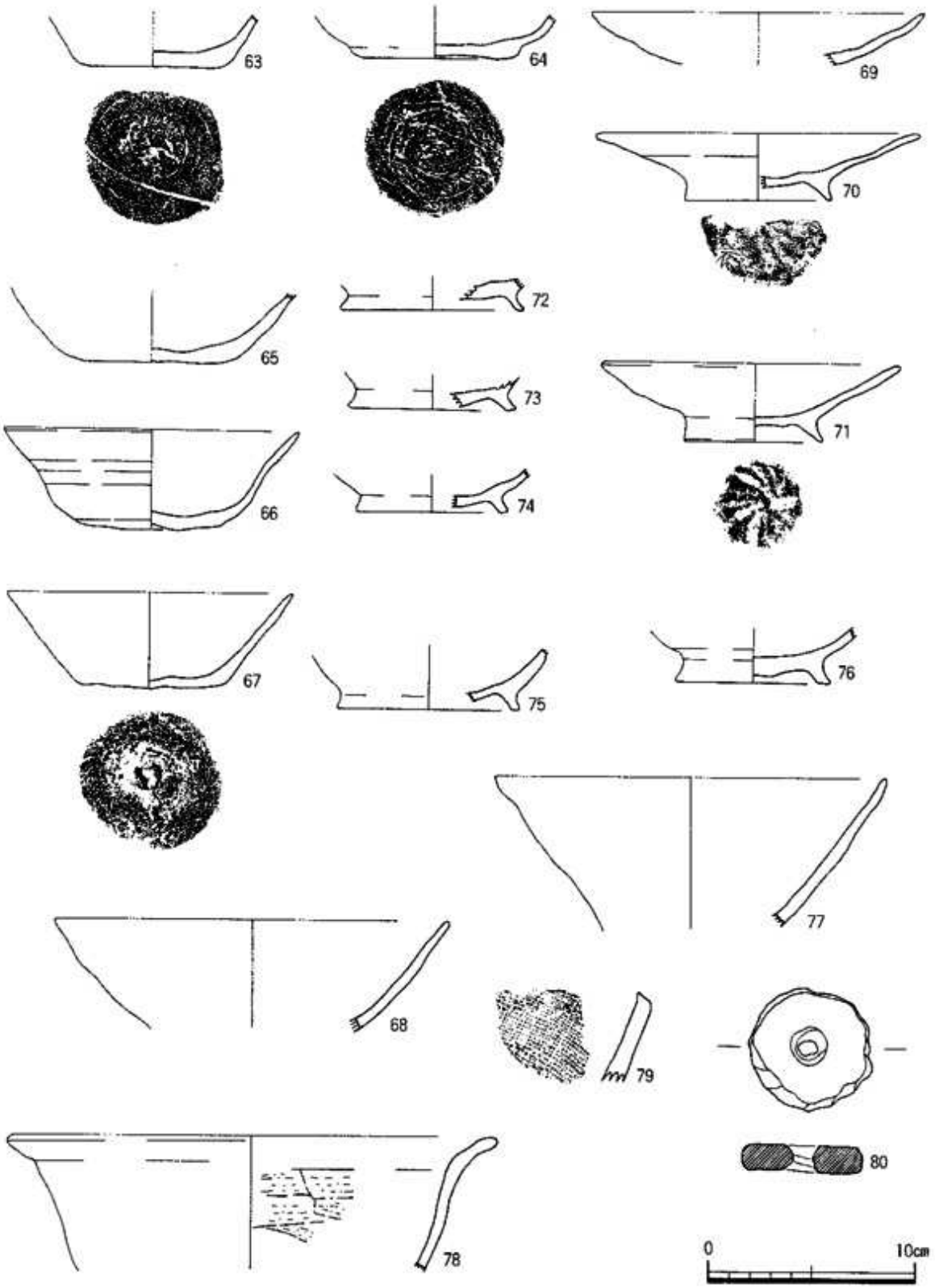
8．濁暗黄褐色弱粘性土（白色粘土とアカホヤが混入）
9．濁淡黒黄色粘性土
10．濁黒黄色粘性土（アカホヤ火山灰層とカシワバンが小ブロック状に少し混入）
11．やや灰色気味の暗黄色粘性土
12．暗青灰色粘性土（アカホヤ火山灰層とカシワバンが小ブロック状に混入）
13．青灰色弱粘性土（炭を多量に混入）
14．撹　乱



第18図　第６号窯実測図（1/30）



第19図　第９号土坑出土遺物実測図（⅓）



第20図　第５号窯出土遺物実測図（⅓）

表2　Eグリット出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	器形	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整・手法 内面	調整・手法 外面	調整・手法 底部	備考
33	14	—	E－1グリット黒褐色土上内	杯	—	7.05		にぶい黄橙色 10YR 7/4 ～ 底部 褐灰色 10YR 5/1	にぶい黄橙色 10YR 7/4	小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
34	14		E－1グリット黒褐色土上内	杯	—	6.6	—	にぶい橙色 7.5YR 7/4 ～ 褐灰色 10YR 5/1	浅黄橙色 7.5YR 8/4 ～ 褐灰色 10YR 5/1	赤色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
45	15	—	E－1グリットピット1	杯	—	7.8	—	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	赤色粒を含む	堅	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
35	14	—	E－1グリット黒褐色土上内	杯	—	6.5		浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	赤色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
36	14		E－1グリット黒褐色土内	杯	—	6.3		にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 7.5YR 8/3	赤色粒と極小砂粒を含む	堅緻	体部ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
37	14	7	E－1グリット黒褐色土内	杯	14.2	7.2	5.0	橙色 5YR 7/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4	赤色粒を含む精良に近い	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
38	14	—	E－1グリット黒褐色土内	高台付椀		8.4	—	黒色	にぶい黄橙色 10YR 7/2	赤色粒を含む	堅緻	ヘラミガキ一部残る	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
42	14	8	E－1グリット黒褐色土内	高台付椀	—	7.8	—	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	赤色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
39	14	—	E－1グリット黒褐色土上内	高台付椀	—	8.3	—	浅黄橙色 7.5YR 8/4	橙色 5YR 7/6	赤色粒を含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
40	14	—	E－1グリット黒褐色土上内	高台付椀	—	8.0	—	浅黄橙色 7.5YR 8/4 ～ 一部浅黄色 2.5Y 7/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3 ～ 一部浅黄色 2.5Y 7/3	赤色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
41	14	—	E－1グリット黒褐色土上内	高台付椀	—	7.7	—	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	極小砂粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
47	15	7	E－1グリットピット1	杯	13.7	7.0	4.9	橙色 5YR 6/8	（体部）明赤褐色 2.5YR 5/6 （底部）橙色 7.5YR 6/8	小砂粒多く含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
46	15	7	E－1グリットピット1	杯	13.3	6.6	4.5	にぶい黄橙色 10YR 7/3 ～ 褐灰色 10YR 6/1	にぶい黄橙色 10YR 7/3 ～ 褐灰色 10YR 6/1	石英小砂粒を少し含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り板状圧痕	
44	14	8	E－1グリット黒褐色土内	甕	22	—	—	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/4	砂粒多量に含む	堅	胴部までケズリ	ナデ	——	
43	14	—	E－1グリット黒褐色土内	鉢	22.7	7.4	7.3	明褐灰色 7.5YR 7/2	浅黄橙色 10YR 8/3	小砂粒を少しと赤色粒を含む	堅	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
48	15		E－1グリット黒褐色土上内	布痕土器		—	—	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/6	砂粒を含む	堅	布目	指によるナデ	——	
49	15	—	E－1グリットピット2	甕	—	—		灰色 5Y 4/1	灰色 5Y 6/1	極小砂粒を含む	堅緻	タタキ痕	格子目タタキ	タタキが残る	須恵器
50	15	—	E－1グリットピット2	甕	24.5	—	—	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 6/3	砂粒を含む	堅	体部までケズリ	ヨコ方向のナデ	——	
51	19	7	第9号土坑 12層	杯	13.7	6	4.22	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	赤色粒(小)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
52	19	7	第9号土坑 11層	杯	13.22	5.95	5.25	にぶい橙色 7.5YR 7/4 ～ 一部褐灰色 10YR 5/1	浅黄橙色 7.5YR 8/4 ～ 橙色 2.5YR 7/6	赤色粒(小)を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
53	19	7	第9号土坑 12層	杯	13.3	6.2	4.95	浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4 ～ （底部）淡赤橙色 2.5YR 7/4	精良に近い赤色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
54	19	7	第9号土坑 12層	杯	13.15	6.2	4.9	橙色 5YR 7/6 ～ 2.5YR 7/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	赤色粒を含む精良に近い	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
55	19	7	第9号土坑 12層	杯	12.8	6.65	5.8	浅黄橙色 10YR 8/3 橙色 5YR 7/6	浅黄橙色 10YR 8/3 にぶい橙色 7.5YR 7/4	赤色粒を含む精良に近い	堅	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	器形	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整・手法 内面	調整・手法 外面	調整・手法 底部	備考
56	19	7	第9号土坑12層	杯	14.45	7	5.2	浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	茶色粒を含む精良に近い	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後丁寧なナデ	
57	19	7	第9号土坑12層	杯	13.4	6.1	4.92	浅橙色 5 YR 8/3	にぶい橙色 7.5YR 7/4	茶色粒を含む精良に近い	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
58	19	7	第9号土坑12層	鉢	13.6	6.1	4.9	にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	精良に近い茶色粒を少し含む	堅緻		ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
59	19	8	第9号土坑12層	高台付椀	-	7.9	-	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/6 (底部) 橙 5 YR 7/6	茶色粒を含む精良に近い	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
60	19	8	第9号土坑12層	高台付椀	14.8	8	5.55	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	茶色小粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
61	19	8	第9号土坑12層	高台付椀	14.7	7.15	5.7	橙色 5 YR 7/8	橙色 7.5YR 7/6	茶色粒を含む精良に近い	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
62	19	8	第9号土坑12層	壺	38.4		-	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	茶色粒と小砂粒を含む	堅緻	口縁部ヨコ方向のナデ体部ケズリ	ロコ方向のナデ	——	
63	20	-	第5号窯 3層	杯	-	6.9	2.6	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	茶色粒(小)少しと極小砂粒敏量を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後外側ナデ	
64	20	-	第5号窯 2層	杯	-	7.6	2.15	浅黄橙色 7.5YR 8/4 (底部) 灰黄 2.5Y 6/2	浅黄橙色 7.5YR 8/4 (底部) 灰黄 2.5Y 6/2	茶色粒を少し含む	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
65	20	-	第5号窯 2層	杯	-	6.5	-	にぶい黄橙色 10YR 7/3	橙色 7.5YR 7/6	極小砂粒を敏量含む	堅緻	ロコナデ	ロコナデ	ヘラ切り後ナデ	
66	20	7	第5号窯 2層	杯	14.5	6.6	4.8	にぶい橙色 5 YR 7/4	橙色 5 YR 7/6	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	
67	20	7	第5号窯 2層	杯	13.7	7.1	4.7	にぶい橙色 5 YR 7/4	にぶい橙色 5 YR 7/4	茶色粒と小砂粒を多く含む	やや堅緻	ヨコナデ	ナデ	ヘラ切り	
68	20		第5号窯 3層	椀 (高台付?)	18.6	-	-	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	精良に近い茶色粒(小)を少し含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	——	
69	20	-	第5号窯 2層	高台付皿	16.0		-	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	極小砂粒を含む	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	——	
70	20	-	第5号窯 3層	高台付皿	15.1	7.05	3.25	褐灰色 10YR 5/1	褐灰色 10YR 5/1	茶色粒を含む	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	ナデ	底部花弁状模様
71	20	8	第5号窯 2層	高台付皿	14.4	6.7	3.75	浅黄橙色 10YR 8/3 ～ 2.5YR 7/3	浅黄橙色 10YR 8/4 ～ 2.5YR 7/3	石英、茶色粒極小砂粒やや含む	堅緻	ヨコナデ	ロコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
72	20	-	第5号窯 3層	高台付椀	-	8.8	-	にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	茶色粒を含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
73	20	-	第5号窯 3層	高台付椀		8.1		にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	茶色粒(中)を含む	堅緻	ロコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部花弁状模様
74	20	-	第5号窯 2層	高台付椀	-	7.2		橙色 5 YR 7/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4	茶色粒を含む	堅緻	ナデ	ロコナデ	ナデ	底部花弁状模様
75	20	-	第5号窯 3層	高台付椀	-	8.75	-	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/4	茶色粒を含む	堅緻	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	底部花弁状模様
76	20	-	第5号窯 3層	高台付椀	-	7.5	-	にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	茶色粒を含む	堅緻	ナデ	ヨコナデ	ヘラ切り高台は丁寧な作り	
77	20	-	第5号窯 2層	脚付椀	18.8	-	-	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	極小砂粒多くと茶色粒を含む	堅	ヨコナデ	ヨコナデ	——	
79	20	-	第5号窯 2層	不明土器		-		赤褐色 10R 5/6	赤褐色 10R 5/6	小砂粒を少し含む	堅	布目痕	指によるナデ	——	
78	20		第5号窯 2層	壺	23.6	-	-	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	茶色粒と小砂粒を含む	やや堅緻	体部ケズリ	ナデ	——	カーボン付着
80	20	8	第5号窯 3層	土製紡錘車	(径) 5.8	(孔径)(外) 1.7 (内) 0.9	(厚) 1.3	にぶい黄橙色 10YR 7/3		砂粒を含む	堅	全体を手づくねで仕上げる孔部分はヘラ状工具を使用			重量 50 g

Ⅲ　まとめ

ここで検出された主な遺構は、土師器の窯（焼成土坑）である。窯と判断したのは、遺構の床面と壁面が強く焼けていること、粘土塊や熱により変形した遺物の出土があること、完形品が少ないこと等を理由とする。

これらの窯における生産器種は供膳用を主とし、その中でも杯、その次に高台付き椀が出土遺物のほとんどを占める。

杯は、器高5㎝以上、口径13.5㎝前後、底部ヘラ切りを主とし、その中で、体部と底部の調整手法から分類可能である。Ⅰ類として、口縁部やや外反し底径7㎝前後で底部前面にナデを施し丁寧に仕上げる。また、体部下位にヘラケズリを施すものもある（25）。Ⅱ類として、底径7㎝前後で体部に回転調整の痕跡が明瞭に残る（1）。Ⅲ類として、底径6㎝前後で口縁部やや外反し、底部外回りをナデたものもある（53）。Ⅳ類として、底径7㎝で底部に薄い粘土板を貼り付けたような形をなし底部全面をナデる（55）。また、これら以外の杯で、器高が低くなり底径8㎝以上となり、雑なつくりのもある（47）。

高台付き椀は、高台は低く、底部高台内側に調整手法の一工程とみられる花弁状模様（ヘラにより放射状に削る痕跡）を施す。高台の調整から、丁寧なつくりで花弁状模様をナデ消しているものと、高台が外開きし花弁状模様をそのまま残すもの、またはその上を軽くナデるものがある。

また、高台付き皿が出土しており、高台径は小さく、高台のつくりが丁寧なものとやや雑なものがある。

このように、出土遺物は須恵器の形態を残すものが多く、また、黒色土器と共伴し、反対に供膳用須恵器を伴っていない。このことから、この遺跡は、9世紀後半、しかも、「小山尻東遺跡[1]」の杯Ⅰ－B類を伴っていないことから、この遺跡出土の杯Ⅰ～Ⅳ類をもって、「小山尻東遺跡」や「西ノ原地区遺跡[2]」よりも前段階のものと思われる。

土師器窯のプランは明確ではないが隅丸長方形に近い形状であり、県内でも「西ノ原地区遺跡」で窯の検出例があり、また他県の出土例をみる限り極端に異なるものではない。さらに、土師器窯は、5基前後でグループを成し、2グループ以上存在する。そして、グループ内の遺物をみる限り、その中で若干の時期差があるものの、窯ごとの時期差かどうか等は比較できる資料を伴う窯が少なく、明確ではない。

土師器の焼成は、杯や椀に頸部を境に上下で色調が異なるものがあることから重ね焼がなされていたと思われる。また、遺物によっては遺物の斜め半分で左右色調が異なるものがあり、一方向から熱が強くあたった結果と考え、製品の床面配置等、いくつかの原因が求められよう。

蕨野遺跡は、調査区西側壁面に焼土と遺物（1）が出土したことから、そこにも窯跡の存在が推定され、土師器生産を目的とした窯跡群の存在が考えられる。今回は、工房跡は検出されなかったが、土師器工人の集団的意味合いをもつ生産遺構として位置づけたい。

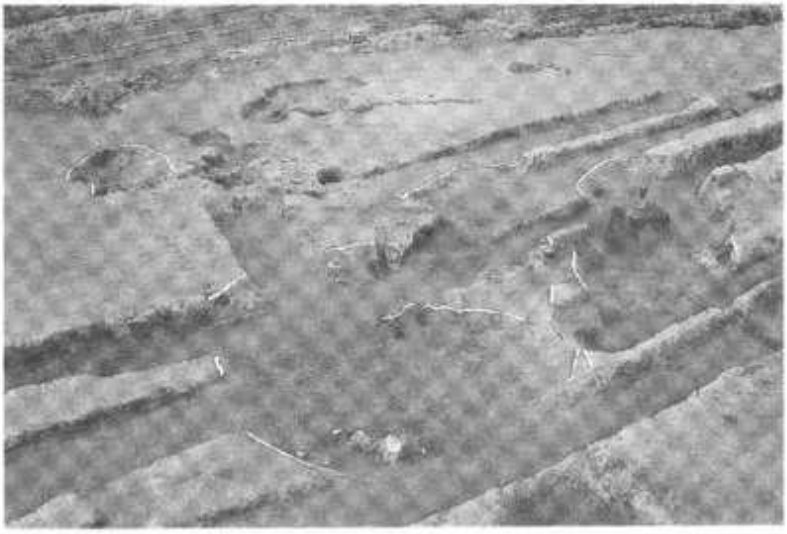
(1)「小山尻東遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集　宮崎県教育委員会　1985

(2)「西ノ原地区遺跡」宮崎市教育委員会　1985

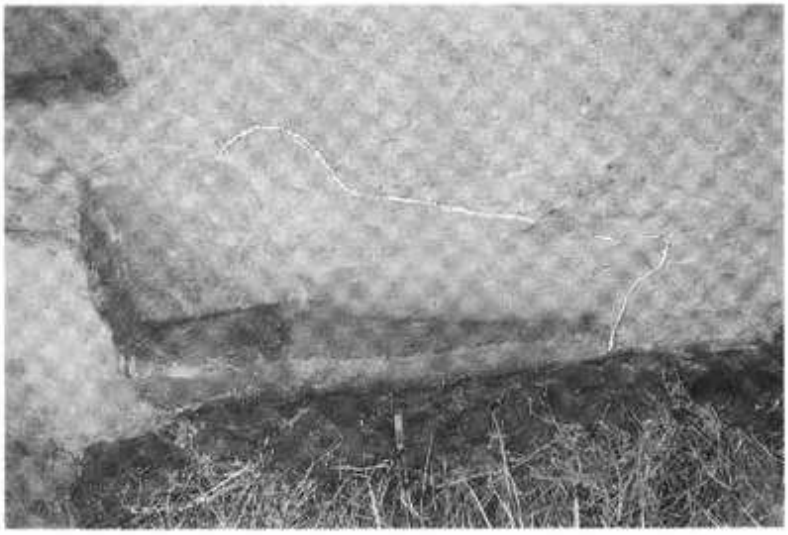
図　　版

蕨野遺跡遠景

Dグリット全景

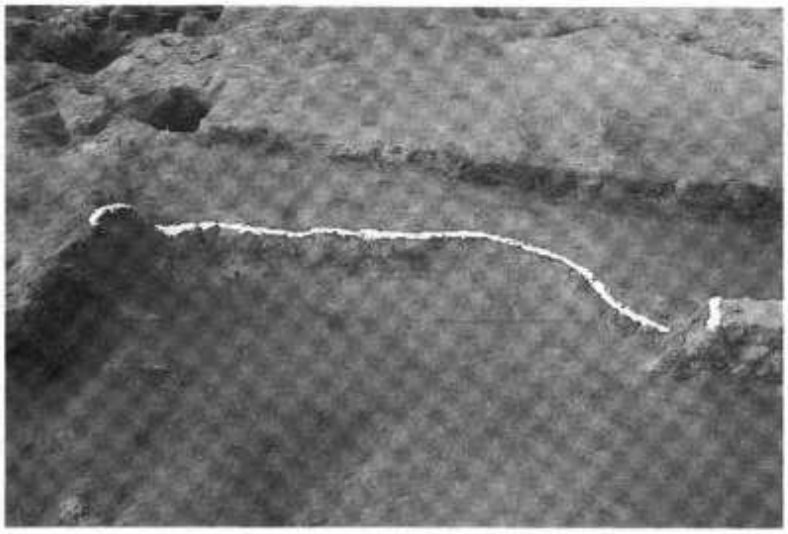


第1号土坑

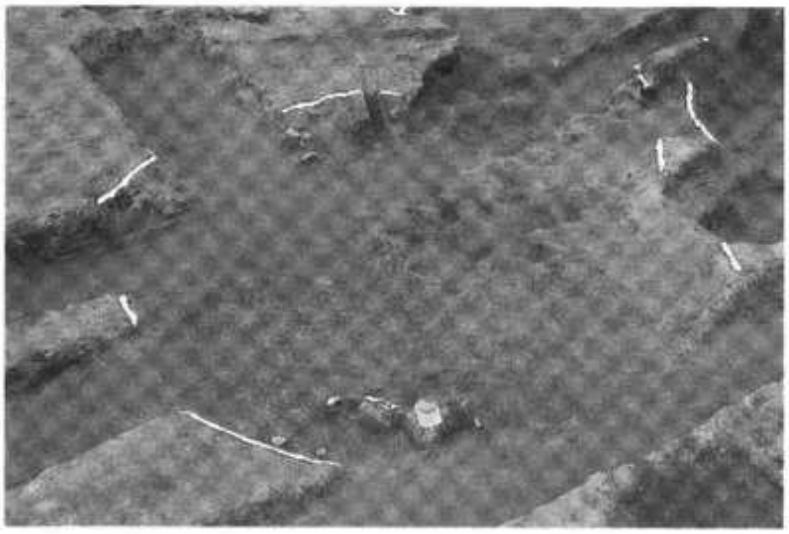


図版2

第2号土坑



第3号土坑

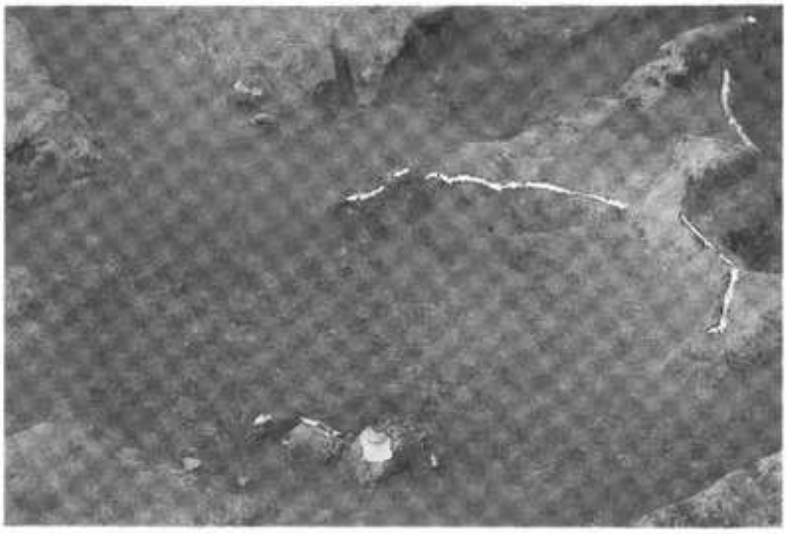


第4号土坑

第1・3号窯

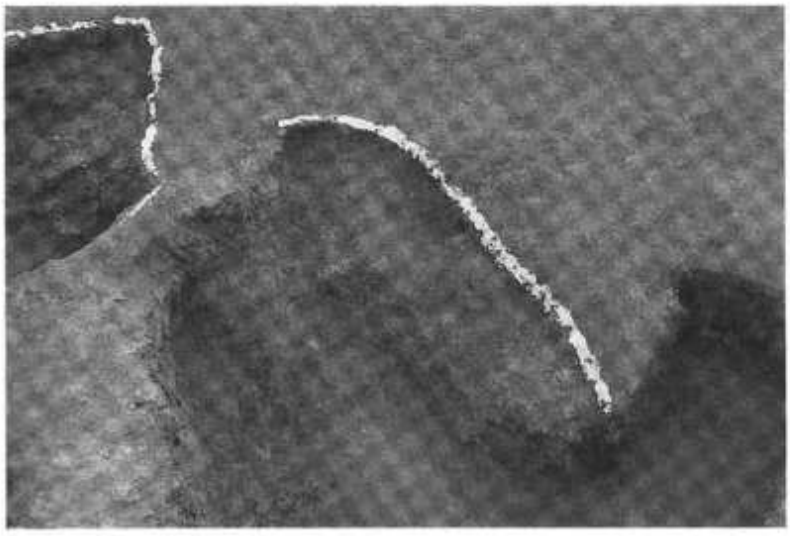
第2号窯
第5号土坑

第6号窯

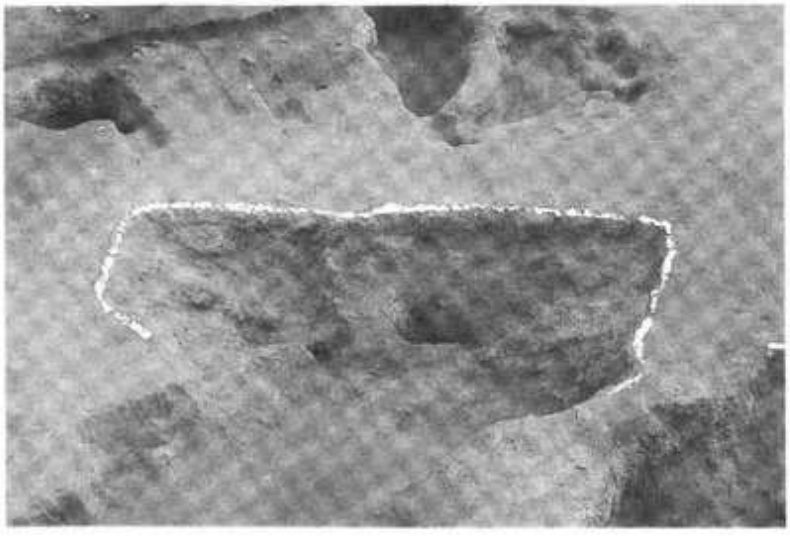


図版4

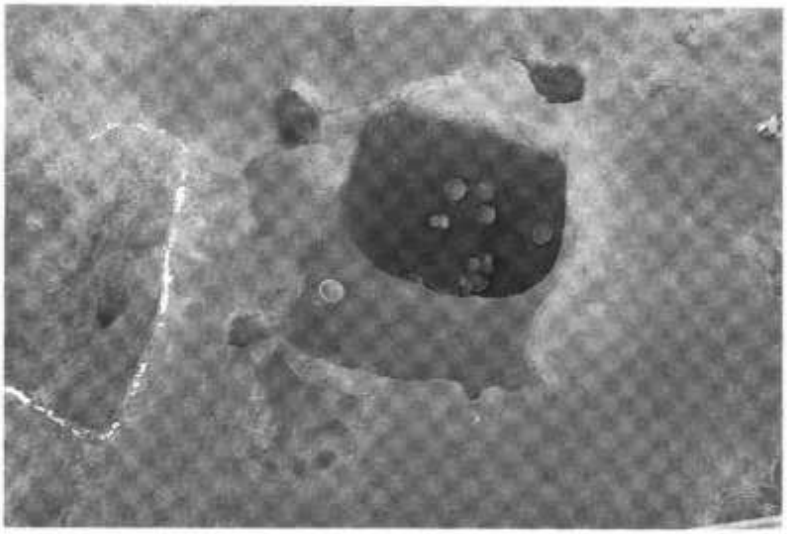
Eグリット全景



第7号土坑

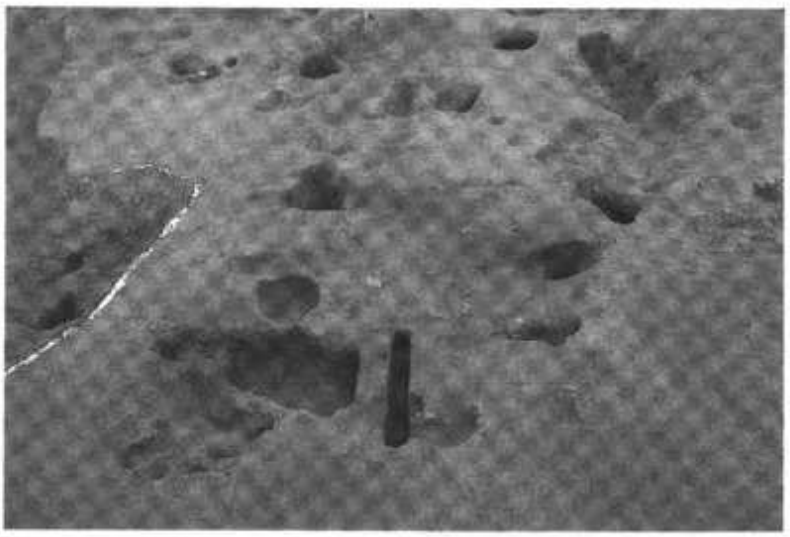


第8号土坑



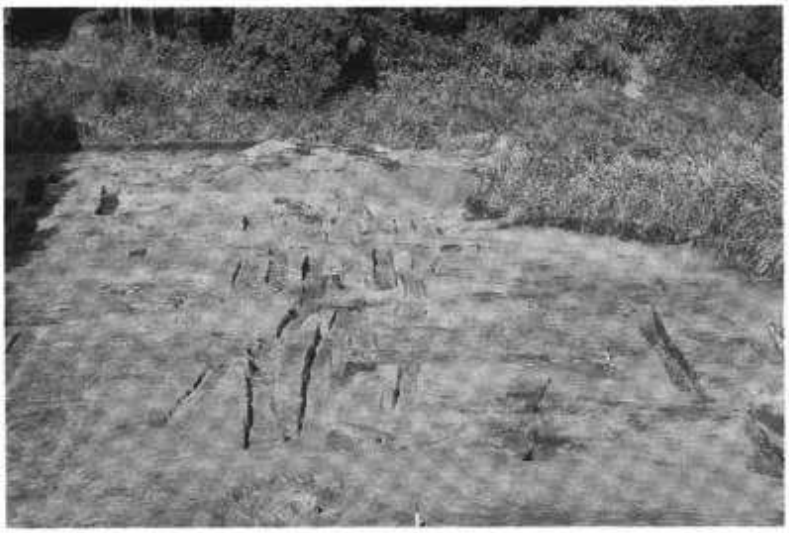
第9号土坑

第9号土坑遺物
出土状況



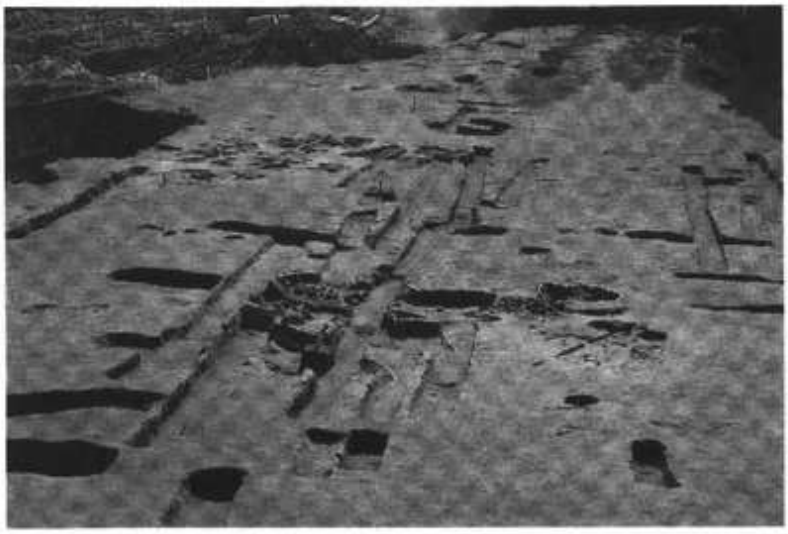
第5号窯

図版6



全景（南から）

全景（北から）



全景（北から）

1

3

13

25

26

37

46

47

52

51

53

54

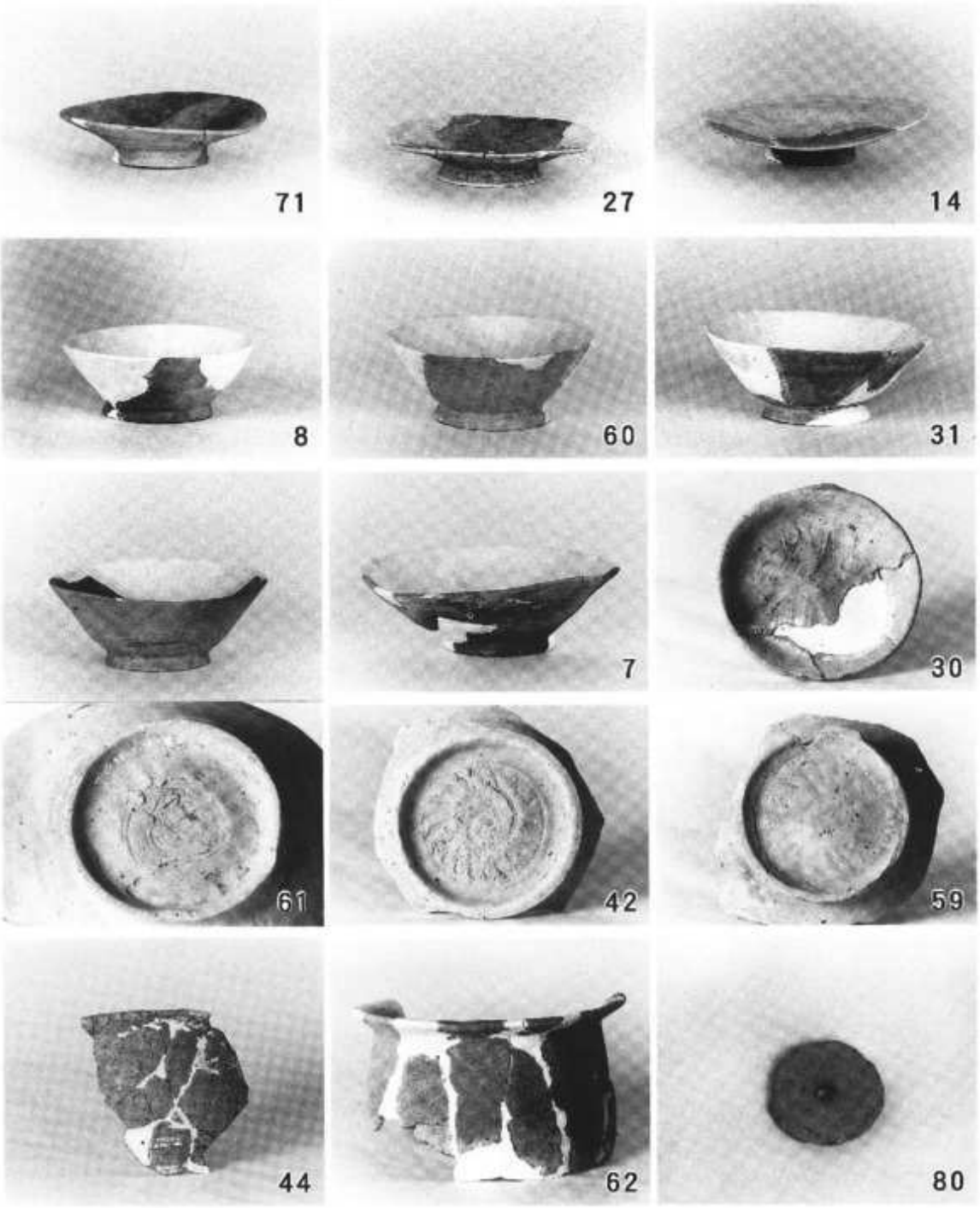
55

56

57

58

67

66

図版8